

42001

教科書文庫

4
810
41-1921
20000 67127

41-1921

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

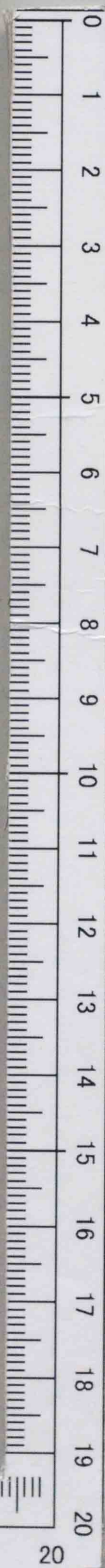


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
大10

寺國語讀本

森合直文編
萩野由之補

卷六



42
810
大10



新定
中等國語讀本卷六目次

一、	人臣の道……………	一
二、	展墓……………	七
三、	筆(新體詩)……………	二二
四、	そぞろ言……………	一四
一、	雪の朝……………	一四
二、	青き眼……………	一五
三、	賤しげなる物……………	一六
四、	見ぬ世の友……………	一六
五、	二つの矢……………	一七

目次

一

五、南へ南へその一	一八
六、南へ南へその二	二二
七、武藏野	二五
八、枯尾花(俳句)	三二
九、藝苑逸話	三四
一、繪佛師良秀	三四
二、鳥羽僧正	三六
三、能因入道	三七
一〇、桃李不言(格言)	三九
一一、木蓮薫る溪谷	四〇
一二、文字	四五

一三、如意輪堂	五二
一四、はれぬ雲(和歌)	五八
一五、讀書の選擇	六一
一六、俳句評釋	六七
一七、修善寺だより(書簡文)	七三
一八、月雪花	七八
一九、東大寺	八一
二〇、諷諭	八六
一、柑子の木	八六
二、石清水詣	八七
三、獅子狛犬	八八

二一、 知己難……………九〇

二二、 室鳩巢に與ふ(書簡文)……………九五

二三、 わが國の海運……………九八

二四、 自警……………一〇五

二五、 膏藥煉……………一〇七

二六、 浮花……………一一三

二七、 爲朝の軍議その一……………一一五

二八、 爲朝の軍議その二……………一二〇

二九、 平和(新體詩)……………一二五

三〇、 世界的市民……………一二七

卷六目次終

新定中等國語讀本卷六

一、 人臣の道

およそ、王土に孕まれて、忠をいたし、命を棄つるは人臣の道なり。必ず、これを、身の高名と思ふべきにあらず。然れども、後の人を勵し、その迹を憫びて、賞せらるるは、君の御政なり。下として、きほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功なくして、過分の望をいたすこと、みづから危むる端なれど、前車の轍を見ることは、誠にあり難き習なりけむかし。

前車の轍
說苑に「前車
覆後車戒」。

御代にや
(ありけむ)

中頃までも、人の、さのみ豪強なるをば戒められき。豪強にな
りぬれば、必ず、驕る心あり。果して、身を滅し、家を失ふためし
なれば、戒められしもことわりなり。鳥羽院の御代にや、諸國
の武士の、源平の家に屬する事をとどむべし」といふ制符た
びたびありき。源平、久しく、武をとりて、仕へしかども、事ある
時は、宣旨を賜りて、諸國の兵を召し具しけるに、近代となり
て、やがてかたらはるる輩多くなりしによりて、この制符は
下されしなり。果して、今までの亂世の基なれば、いひがひな
き事になりにけり。

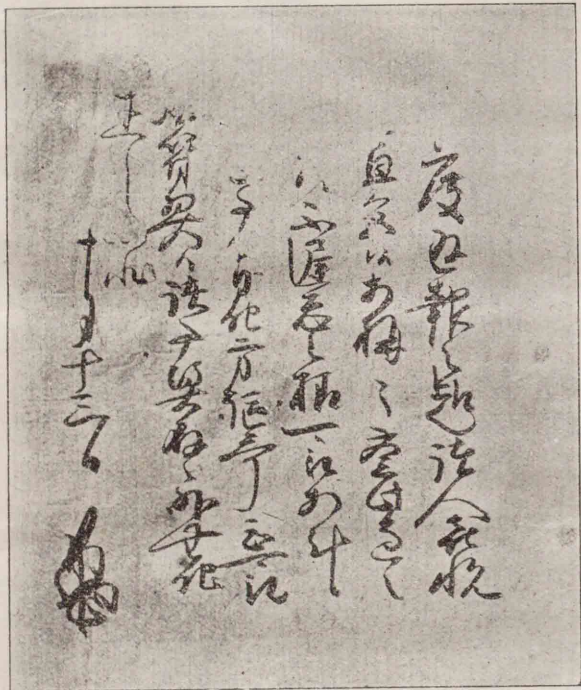
この頃よりのことわざには、一度、軍にかけあひ、或は、家子、
郎從、節に死ぬるたぐひもあれば、わが功におきては、日本國

などぞ一申
すめる

を賜り、もしは、半國を賜るとも足るべからずなどぞ申すめ

言語は云云
易に、「言行君
子樞機」。

堅き氷は云
云
易に、「履霜
堅氷至」。



源親房筆蹟

る。誠に、さまで思ふ
ことはあらじなれ
ど、やがて、これより
亂るる端ともなり、
又、朝家の輕輕しさ
もおし量らるるも
のなり。言語は、君子
の樞機なり」といへ

り。あからさまにも、君を蔑にし、人に驕ることはあるべから
ぬ事にこそ。堅き氷は、霜を履むより至るならひなれば、亂臣、

許由、巢父
共に、支那古
代の隱者。
潁川
支那河南省。

賊子といふものは、そのはじめ、心詞を慎まざるより出でく
るなり。世の中の衰ふと申すは、日月の光の變るにもあらず、
草木の色の改るにもあらず。人の心の悪しくなり行くを、末
世とはいへるにや。昔、許由といふ人は、帝堯の國を傳へむと
ありしを聞きて、潁川に、耳を洗ひき。巢父は、これを聞きて、こ
の水をだにきたながりて、渡らざりき。その人、五臟、六腑のか
はるにはあらず。能く思ひ習はせる故にこそあらめ。

なほ、行末の人の心、思ひやるこそあさましけれ。大方、おの
れ一身は、恩に誇るとも、萬人の怨を遺すべきことをば、など
か顧みざらむ。君は、萬姓の主にてましませば、限ある地をも
ちて、限なき人に頒たせ給はむことは、推しても量り奉るべ

し。もし、一國づつを望まば、六十六人にて、皆塞りなむ。一郡づ
つといふとも、日本は、五百九十四郡こそあれ、五百九十四人
は悦ぶとも、千萬の人は喜ばじ。況や、日本の半を心ざし、皆な
がら望まば、帝王は、いづくをしらせ給ふべきにか。かかる心
の萌して、言葉にもいだし、面にも羞づる色のなきを、謀叛の
始とはいふべきなり。將門が、比叡山に登りて、大内を遠見し
て、謀叛を思ひ企てけるも、かかる類にやありけむ。昔は、人の
正しくて、將門に見も懲り、聞きも懲りけむを、今は、人人の心
かくのみなりにたれば、この世は、愈衰へぬるにや。

漢の高祖の、天下を取りしは、蕭何、張良、韓信が力なり。これ
を三傑といふ。萬人に勝れたるを、傑といふとぞ。中にも、張良

蕭何
沛の人。高祖
に仕へて、常
に、軍の糧食
を主る。後相
國となる。

〔四六八年〕
韓信

淮陰の人。漢の天下を取
る。大抵、信の功なり。楚王に封ぜられしが、高祖に忌まれて殺さる。〔四六五年〕

留

河南省開封府。

文治の頃

文治五年七月。

泰衡

藤原氏。秀衡の子。〔二八一年〕一八四九年

平重忠

畠山氏。賴朝の功臣。〔一八二四年〕一八六五年

は、高祖、これを師として、籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを、千里の外に決するは、この人なり」と宣ひしかど、更に、驕ることなくして、留といひて、すこしきなる所を望みて、封ぜられにけり。あらゆる功臣、多く亡びしかど、張良は、身を全くしたりき。近き代の事ぞかし、賴朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討せしに、みづから向ふことありしに、平重忠が、先陣にて、その功勝れたりければ、五十四郡の中、いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたるすくなき所を望み賜りけりとぞ。これは、人に、ひろく、賞をも行はしめむがためにや、賢かりけるをのこにこそ。又、直實といひける者に、一所を與へ給ふ下文に、「日本第一の剛の者なり」と書きて賜

直實

熊谷氏。〔一八六八年〕

ひてけり、一とせ、かの下文をもちて、奏聞する人のありけるが、褒美の詞の甚しきに、與へたる所の少きまことに、名を重くして、利を軽くしける、いみじき事」と、口口に譽めあへりけり。いかに心得て、譽めけむと、いとをかし。これまでの心こそなからぬ、事に觸れて、君をおとし奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の東國の風儀も變り果てぬ。公家のふるき姿もなし。いかになりぬる世にかと歎くともがらもありと聞えき。(神皇正統記)

二、展 墓

去る者は日に疎し

「去る者は、日に疎し」とは、一わたりの道理で、私などは、却

文選の古詩
に、去者日以
疎、來者日以
親。

つて、年と共に、死んだ親を慕ふ心が、深く、厚く、濃になるやうだ。

去年の事だ。私は、久振で、展墓の爲歸省した。寺の在る處は、舊は、寂しい町はづれで、門前の芋畠を吹く風も悲しい程だつたが、今は、可なりの町並になつて居て、昔、能く休んだことのある門の脇の掛茶屋は、影も形も無くなり、その迹が、白ベ
ンキの、奇拔な看板を揚げた理髮店になつてゐる。

が、寺は、その反對に荒れ果てて、門は、さ程でもなかつたが、突あたりの本堂も、その側の庫裏も、多年の風雨に曝されて、處處、壁が落ち、下地の骨が露れ、屋根には、名も知れぬ草が生えて、甚しく寂れてゐた。私は、臺所口で、寺男が、内職に賣つて

ゐる櫛を、四五本買つて、井戸に往つて、釣瓶繩が腐つて、切れさうになつてゐるのを心配しながら、漸く、水を汲み上げた。手桶片手に、櫛を提げて、本堂を、ぐるりと廻つて、後の墓地へ來て見ると、新佛があつたと見えて、地尻に、高い杉の木の下に、白張の提燈が二張、はたはたと、風に鳴つてゐる。流石に、微に覺があるから、たしか、彼の邊だなど、見當を附けて置いて、さて、昨夜の雨でぬかる墓場道を、蹴揚の泥を厭ひ厭ひ、度々、下駄を取られさうになりながら、それでも迷はずに、先祖代代の墓の前に出た。

祠堂金を納めてある筈、僅ばかりでも、折折の附届も怠らなかつた積だのに、これはまた、如何な事。何時掃除したこと

やら、臺石は、一杯に、青苔が蒸して、石塔も、白い鬼苔に蔽はれ、天邊に、二處三處、べつたりと、白い鳥の糞が附いてゐる。勿論、木の葉は、堆く積つて、雜草も生えてゐたが、花立の竹筒は、何處へ往つた事やら、影も見えなかつた。

私は、掃除することを忘れて、これに對して、暫く、悵然として立つてゐた。

祖母の死後數年、父母も、その迹を追うて、この墓の下に埋つてから、既に、幾星霜を経てゐる。墓石は、戒名も讀みかねる程、苔蒸して、默然として、何も語らぬけれど、今來て、まのあたり、これに對すれば、何となく、生きた人と、顔を合はせたやうな感じがある。懐しい人達が、まだ、達者でゐた頃の事が、夫

からそれと、止どなく想ひ出されて、祖母が、縁先に、圓くなつて、日向ぼつこをしてゐる格構、父が、眼も鼻も一つにして、大きな嚏をしようとする面相、母が禪掛で、張物をしてゐる姿などが、ありありと、目の前に浮ぶ。

さつと、風が吹いて通る。木の葉が、ざわざわと騒ぐ。木の葉の騒ぐのとは思ひながら、澄んだ耳には、聽覺ある皺唄れた聲や、快活な高聲や、低い弱い聲が、紛紛と絡み合つて、何やら頻に慌しく話してゐるやうに思はれる。一しきりして、はたと、それが止むと、あとは、寂然となる。と、私の心も、寂然となる。その寂然となつた心の底から、ふと、戀しさが、勃勃と涌いて出て、私は、我知らず涙ぐんだ。ああ、成らう事なら、この儘、この

墓の下へはひつて、もう、浮世には戻りたくないと思つた。(長谷川四迷)

三、筆 (武島羽衣)

月花めづるみやび男が
向ふつくゑの紙のうへ、
はしればやがて歌成りて、
星照り日出で烏うたふ。
天地ゑがく繪だくみが、
倚るやみなみの窓の下、
うごけば聴て晝は成りて、

水落ち木生ひ草あをし。

壯心鬱勃天を衝く、

英雄の手に觸るる時、

落筆のもと龍蛇とび、

雲煙くらく地をおほふ。

慷慨淋漓怒髪立つ、

志士の腕に執られては、

片言隻句鬼神泣き、

哀音ながく世につたふ。

功成り名とげ業卒へて、

身は棄てらるる籠の中、

消ゆれども
—うらみず

煙と化して消ゆれども、
うらみぬ筆の心清しや。

四、そぞろ言

十一、雪の朝

雪のおもしろう降りたりしあした、人のがり、いふべき事ありて、文を遣るとて、雪のこと、何ともいはざりし返事に、「この雪いかが見ると、一筆宣はせぬ程の、ひがひがしからむ人の仰せらるる事聞き入るべきかは。返す返すくちをしき御心なり」といひたりしこそをかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりの事も忘れがたし。(徒然草)

いひたりし
こそ—をか
しかりしか

二、青き眼

さしたる事なくて、人のがり行くは、善からぬ事なり。用ありて行きたりとも、その事果てなば、とく歸るべし。久しく居たる、いとむづかし。人と對ひたれば、詞も多く、身もくたびれ、心も静ならず、よろづの事障りて、時を移す。互の爲、益なし。厭しげにいはむもわるし。心づきなき事あらむ折は、なかなか、その由をいひてむ。同じ心に對はまほしく思はむ人の、つれづれにて、今しばし、今日は、心静に「などいはむは、この限にはあらざるべし。阮籍が青き眼、たれもあるべき事なり。その事となきに、人の來りて、のどかに物語して歸りぬる、いとよし。又、文も、久しく聞えさせねば」などばかりいひおこせたる、

阮籍が青き
眼
晉書に、阮籍
が事をいひ
て、不拘禮
教、能爲青白
眼對人。

いと嬉し。(徒然草)

三、賤しげなる物

賤しげなるもの。居たるあたりに、調度の多き、硯に、筆の多き、持佛堂に、佛の多き、前栽に、石、草木の多き、家の内に、子孫の多き、人にあひて、詞の多き、願文に、作善、多く書き載せたる。多くて見苦しからぬは、文車の文、塵塚の塵。(徒然草)

四、見ぬ世の友

ひとり、燈火の下に、文をひるげて、見ぬ世の人を友とするこそ、こよなる慰むわざなれ。文は、文選のあはれなる卷卷、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この國の博士どもの書けるものも、いにしへのは、あはれなる事多かり。(徒然草)

文選

六十卷。梁の昭明太子の編。周以來の詩文集なり。
白氏文集
七十五卷。唐の白居易の詩文集なり。

南華の篇

莊子のこと。
八卷。莊周の著。唐の代、莊子を尊びて、南華真人と稱せしより、一に南華真經といへり。

五、二つの矢

ある人、弓射ることを習ふに、諸矢をたばさみて、的に向ふ。師の曰はく、初心の人、二つの矢を持つこと勿れ。後の矢を頼みて、はじめの矢になほざりの心あり。毎度、ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へといふ。僅に二つの矢、師の前にて、一つをおろかにせむと思はむや。懈怠の心、みづから知らずと雖も、師、これを知る。このいましめ、萬事に互るべし。道を學する人、夕には、朝あらむことを思ひ、朝には、夕あらむことを思ひて、重ねて、ねんごろに修せむことを期す。況や、一刹那のうちに於いて、懈怠の心あることを知らむや。何ぞ、只今の一念において、直にすることの、甚だ難き。(徒然草)

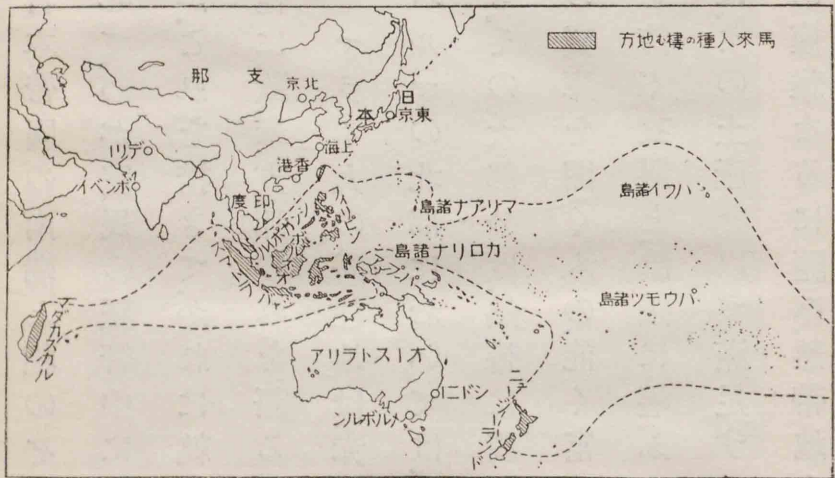
其命維新
詩經に、「周
雖舊邦其命
維新」。

江漢の朝宗
書經に、「江漢
朝宗于海」。

五、南へ南へその一

わが日本は、建國以來二千五百年、居然たる舊邦の一なりと雖も、其命維新にして、世界列國の群に入りてより、僅に五十年に過ぎず。故に、凡百の事物、範を歐米に取るを免れざるより、わが士君子の、歐米に遊ぶもの、江漢の朝宗するが如くなりき。已にして、わが國運勃興し、國力漲溢するや、支那の、地積の廣大、人口の夥多、物資の豊富なる、殆ど、わが國民の耳目を眩惑せんとし、朝野相競うて、力を支那に用ゐんと欲す。故に、わが國人の知るところは、世界の西にあらずんば、即ち北にして、政治家の經綸も、志士の企畫も、詩人の想像も、實業家

Malay
マライ



の勘算も、皆、西方歐米人もしくは、北方蒙古人の國を主題とするものにして、南方マライ人の國に至りては、全然、これを、等閑に附し去れるもの如し。われらは、嘗て、小學校において、およそ、地球上の人種は、五箇に分る。いはく、歐羅巴人種、蒙古人種、亞弗利加人種、馬來人種、亞米利加人種これなり」と教へられたりき。而して、このマライ人種は、大

日本帝國の南端と相のぞむ地にありて、その血液は、混混として、わが國民の脈管中に融入せるにかかはらず、わが國人が、これを措きて、かれに就き、マライ人を了解するもの少く、徒に、歐、米、支那のみを語るもの多きは、何ぞや。

マライ人の居住地は、赤道直下より起りて、南北に分布し、バルマの北部においては、北緯二十八度の地を境とすと雖も、その大部分は、熱帯に屬す。熱帯は自然の寶庫にして、唯、この寶庫を開くもの、能く富むを得べし。蓋し、人類が、單に、寒氣を防ぐ衣服と、饑餓に堪ふる食物とを以て、足れりとする間は、その土産を以て、満足するを得べしと雖も、人文發達し、生活複雑なるに隨ひ、熱帯地方の産物なくては、殆ど、生活に、趣

Cocca-nut ココナット Gum ゴム Teak チーク Coffee 咖啡



味を添ふる能はざるが如し。歐米人は、今日、咖啡、もしくは、紅

茶なくして、その生を樂む能はず。軍艦、商船の甲板には、チーク樹を用ゐざる能はず。機那、阿片なくして、今日の醫療を全うし得べきか、マニラ繩なくして、今日の運輸事業を全うし得べきか、麻布の供給なくして、今日の産業を維持し得べきか、電話、電信、および、機械の運轉は、ゴムなくして、今日の如くなり得べきか。その他、砂糖、獸皮、黑鉛、ココ

南洋風俗

ナット油、香料、染料、塗料等は、主として、熱帶地に産するものにして、これらを除きては、今日の文明、および、生活を維持し得べからざらん。現に、わが臺灣總督府は、樟腦を專賣するがため、世界の樟腦事業を制御するを得。これに反して、わが國の米價は、佛領印度、英領バルマの米價によりて制御せらるるを免れず。論じて、ここに至れば、熱帶地を制御するものは、即ち、世界の市場を制御する力あり」といふもの、眞に、甚深の意義あるを覺ゆ。

六、南へ南へその二

和蘭は、嘗て、世界の銀行なりき。これ、その熱帶植民地の貿

壟斷
孟子に、「有
賤丈夫焉、必
求壟斷而登
之、以左右
望、而罔二市
利。龍は壟に
通ず。

易を專有したるが爲に外ならず。西班牙、葡萄牙が、嘗て、世界の覇者たりし時代もありき。これ、その、東印度、西印度の富を壟斷したるが爲に外ならず。今日の英國の富裕も、印度以下の熱帶地を有すること、その、六七分の原因をなせり。英國と和蘭とが、十六、十七兩世紀の間、海上の交戦、寧日なかりしは、即ち、また、マライの海洋を制せんと欲したるに外ならず。然れば、列國が、今相競りて、熱帶に、植民地を得んと欲するもの、偶然にあらざるを知るに足らん。現に見よ、千百年間、猛虎と悪政とに苦みたる越南地方には、已に、佛人が、マライ人を基礎として、一大帝國を建設しつつあるにあらざや。マライ半島の英國植民地も、今や、漸く、國民的色彩を帯び來らんとし、

Philippine
フィリッピン

米國も、已に、フィリッピンを占領して、新國民を作りつつあり。唯、ひとり、蘭領印度のみは、依然として、泰平を保つと雖も、各國が、これに垂涎して窺ふこと、一朝一夕にあらず。思ふに、政治上にも、通商上にも、マライ人の國は、今後二十年間、最も多事多端なる局面とならんか。わが國家勃興の隆運に當り、才能、勞力、資本の、外に向つて漲溢せんとするに際し、マライ人の國、あに、等閑に、看過すべけんや。

嗚呼、わが同胞よ。一億萬のマライ人は、英佛の文化を受くるものの外、わが開誘を須つもの、雲霞の如し。歐洲人が、マライの海を探ること數百年なれども、その大寶庫たるは、昔日と、變化なく、これを開くものを待てるなり。日本國民、もし、能

Emerald
エメラルド

く、この大寶庫を開くを得ば、大國民の宏業、ここに完成すといふを得ん。余、故にいはいはく、わが日本の將來は、北にあらずして、南にあり。大陸にあらずして、海にあり。日本人民の注目すべきは、太平洋を以て、わが湖沼とする大業にありと。椰子樹の、酒を生ずるところ、芭蕉の子の、累累として實るところ、エメラルドの如き海水の、澱むところ、極樂鳥の舞ふところ、日本國民の、偉大なる運命は、封じて、この中にあり。(竹越與三郎—南國記による)

七、武藏野

昔の武藏野は、萱原の、はてもない光景で、絶類の美を鳴し

秩父嶺
武藏國秩父
郡。

て居たやうにいひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は、實に、今の武藏野の特色といつてもよい。その木は、重に楡の類で、冬は、悉く落葉し、春は、滴るばかりの新緑が萌え出る。その變化が、秩父嶺以東十數里の野、一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、綠蔭に、紅葉に、様様の光景を呈する。その妙は、一寸西國や、東北地方の者には解りかねる。元來、日本人は、これまで、楡の類の落葉林の美を、あまり知らなかつた。林といへば、重に、松林のみが、日本の文學、美術のうへに認められて居て、歌にも、楡林の奥で、時雨を聞くといふやうなことは、頗る稀である。

思つた一足
らないだら
うと

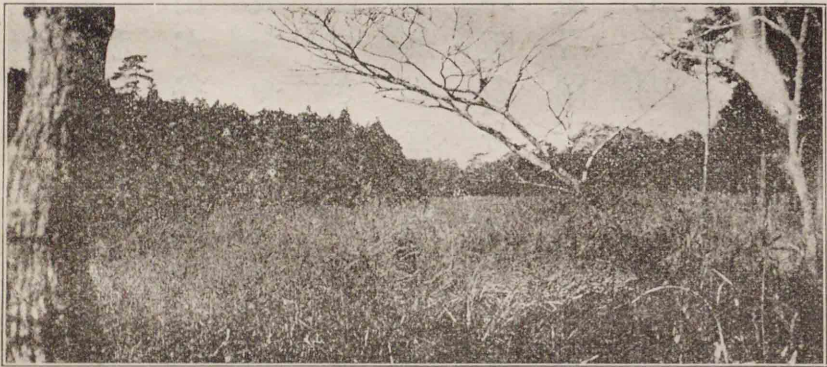
自分は、屢思つた。もし、武藏野の林が、楡の類でなく、松か何かであつたら、極めて平凡な、變化に乏しい、色彩の一樣なものとなつて、さまざま珍重するに足らぬだらうと。

楡の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が囁く、木枯が叫ぶ。一陣の風、小高い丘を襲へば、幾千萬の木、葉高く、大空に舞うて、小鳥の群のやうに、遠く飛び去る。木の葉が落ち盡せば、數十里の方域に互る林が、一時に、裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が、高く、そのうへに垂れ、武藏野一面が、一種の沈靜に入る。空氣が、一段と澄み渡る。遠い物音が、鮮に聞える。自分は、日記に、林の奥に坐して、四顧し、傾聽し、諦視し、默想すと書いた。ツルゲニエフが、林間の晩秋を描いたものにも、坐して、四顧して、そして、耳を傾けたとある。この耳を傾け

ツルゲニエ
フ
Turgeinief
露國の小
説家。(二
四七八年
一、二、五、四
三年)

て聞くといふことが、どんなに、秋の末から、冬へかけての、今の武藏野の心に適つてゐるだらう。秋ならば、林のうちから起る音、冬ならば、林の彼方に、遠く響く音、鳥の羽音、囀る聲、風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲、叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音、空車、荷車の、林をまはり、阪を下り、野路を横ぎる響、蹄で、落葉を蹴散す音、これは騎兵演習の斥候か、さもなれば、夫婦連で、遠乗に出かけた外國人である。何事をか、聲高に話しながら行く、村の者のだみ聲、それも、何時しか遠ざかつてゆく。獨さびしさうに、道を急ぐ女の足音、遠く響く砲聲、鄰の林で、だしぬけに起る銃音。

時雨の音に至つては、これほど幽寂なものはない。昔から、



井の頭の

和歌の題にまでなつて居る。廣い野末から、野末へと、林を越え、森を越え、田を横ぎり、又、林を越えて、しのびやかに通り過ぎる時雨の音の、如何にも幽で、又、鷹揚な趣があつて、優しく、懐しいのは、實に、武藏野の時雨の特色であらう。自分は、嘗て、北海道の深林で、時雨に遭つたことがある。これは、又、人迹絶無の大森林であるから、その趣は、更に深いが、そのかはり、武藏野の時雨の、人なつかしく、囁くや

中野、澀谷、
世田が谷
東京の近郊。
小金井
武蔵國北多摩
郡。櫻花の名
所。

うな趣はない。

秋の中ごろから、冬のはじめ、試に、中野あたり、或は澀谷、世田が谷、または、小金井の奥の林を訪うて、暫く坐つて、散歩の疲をやすめて見よ。それ等の物音、忽ち起り、忽ち止み、次第に近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉、風もないに落ちて、かすかな音をたて、それも止んだ時、自然の靜肅を感じ、永遠の呼吸の身に迫るを覺えるであらう。武藏野の冬の夜更けて、星斗、闌干とさえた時、星をも吹き落し、さうな野分が、すさまじく、林を渡る音を、自分は、屢、日記に書いた。風の音は、人の思を、遠くに誘ふ。自分は、この物凄い風の音の、忽ち近く、忽ち遠いのを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひつづけ

たこともある。

熊谷直好の和歌に、

夜もすがら、木の葉かたよる、音きけば、

しのびに風の、かよふなりけり。

といふがあれど、自分は、山家の生活を知つて居ながら、この歌の心を、げにもと感じたのは、實に、武藏野の冬の村居の時であつた。

林に坐つて居て、日の光の、最も美しきを感じるのは、春の末から、夏の初で、その次は、黄葉の季節である。半黄いろく、半緑な林のうちを歩いて居ると、澄み渡つた大空が、稍稍のあひ間からのぞかれて、日の光は、風に動く葉末、葉末に碎け、そ

熊谷直好
周防の人。香
川景樹の門
人。(二四四二
年—二五二二
年)

の美しさはいひ盡されぬ。日光とか、碓氷とか、天下の名所はともかく、武藏野のやうな、廣い平原の林が、隈もなく、染つて、日の西に傾くと共に、一面の火花を放つといふも、特異の美観ではあるまいか。(國木田獨歩―武藏野)

八、枯尾花

化ものの、正體見たり、かれ尾花。	横井也
春の海、日ねもすのたり、のたり哉。	谷口燕村
菜の花や、月はひがしに、日は西に。	同
羽蟻とぶや、富士の裾野の、小家より。	同
明月や、夜は人すまぬ、みねの茶屋。	同

あかつきや、鯨の吼ゆる、しもの海。	加藤曉臺
人こひし、ひともし頃を、ちる櫻。	加舎白雄
枯蘆の、日に日にをれて、流れけり。	高桑闌更
橋落ちて、人岸にあり、なつの月。	炭太祇



蹟筆村燕口谷

まさご路や、かげろふを追ふ、波頭。	高井几董
やま寺や、縁のしたなる、こけ清水。	同
馬借りて、かはるがはるに、霞みけり。	大島蓼太
世の中は、三日見ぬまに、さくらかな。	同

能因
俗名橋水愷。歌人。白河天皇の代の人。

さみだれや、ある夜ひそかに、松の月。大島 蓼 太
能因に、くさめさせたる、秋はここ。多古大 江丸

九、藝苑逸話

一、繪佛師良秀

良秀
傳未詳。

知音
説苑に、「鍾子

繪佛師良秀といふ僧ありけり。家の鄰より、火出で来て、おしおほひければ、大路に出でにけり。人の書かする佛もおはしけり。又、物も打ちかづかぬ妻子なども、さながら在りけり。それをも知らず、身ばかり、ただ一人出でたるを事にして、むかひのつらに立てりけり。火は、わが家に移りて、煙燄くゆりけるに、大方さりげなげにてながめけるを、知音どもとぶ

期死、伯牙破琴絶絃、終身不復鼓琴、以爲世無知音者し。

不動尊

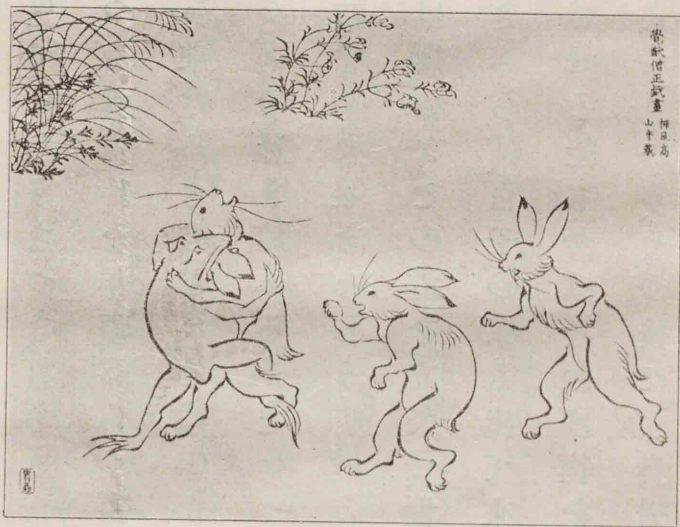
五大尊明王の中尊。右手劍を持ち、左手索繩を持ち、背に火燄を負ふ。

我黨こそ惜み給へ

らひけれども、騒がざりけり。いかにと見れば、家の焼くるを見て、打ちうなづき、打ちうなづきして、時時笑ひて、あはれ、しつる所得かな。年頃、わろく書けるものかな」といふ時、とぶらひ來けるものども、こはいかに。かくてはあさましきことかな。物の憑き給へるか」といへば、何條物の憑くべきぞ。年頃、不動尊の火燄を、あしう書けるなり。はや見取りたり。これこそは所得よ。この道を立てて、世にあらむには、佛をだに、よく書き奉らば、百千の家も出て來なむずるものを。我黨こそ、このさせる能もおはせねば、物を惜み給へ」といひて、あざ笑ひて、立てりけり。その後、にや、良秀がよぢり不動とて、人人めであへりけり。(十訓抄)

二、鳥羽僧正

鳥羽僧正
名は覺猷。戲
畫の名手。
二七一三年
一八〇〇
年



鳥羽僧正戲畫

鳥羽僧正は、近き世には、竝なき繪かきなり。法勝寺の金堂の扉の繪かきし人なり。いづ程のことにか、供米の不法の事ありける時、辻風の吹きたるに、米の俵を、多く吹き揚げたるが、塵灰の如くに、空にあがるを、大童子、法師ばらが走り寄り、取りとどめむとしたるを、さまざまに面白う、筆を揮ひて書かれけるを、誰がし

院
鳥羽法皇

三島
越前郡大三島
宮浦なる三島
神社なり。

たりけむ、その繪を、院御覽じて、御入興ありけり。その心を、僧正に、御尋ありければ、あまりに、供米、不法に候ひて、實の物は入り候はで、糠のみ入りて、かるく候ふゆゑに、辻風に吹き揚げられ候ふを、さりとてはとて、小法師ばらが取りとどめむとし候ふがを、かしう候ふを、書いて候ふと申されければ、比興のことなりとて、それより、供米の沙汰厳しくなりて、不法のことなかりけり。(古今著聞集)

三、能因入道

能因入道、伊豫守實綱に伴ひて、彼の國に下りたりけるに、夏のはじめ、日、久しく照りて、民のなげき淺からざるに、神は、和歌にめでさせ給ふものなり。試に詠みて、三島に奉るべき

由を、國司、頻に勧めければ、

あまの川、苗代水に、せきくたせ、

あまくだります、神ならば神。

と詠めるを、みてぐらに書きて、神司かんがきして、申し上げたりければ、炎旱の天、俄に曇り渡りて、大いなる雨降りて、枯れたる稲葉、おしなべて、緑に反りにけり。忽に、天災を和ぐることに、唐の貞觀の帝の、蝗を吞めりける故事にも劣らざりけり。この入道は、至れるすき者にてありければ、

都をば、霞とともに、たちしかど、

あきかぜぞふく、白河のせき。

と詠めるを、都にありながら、この歌を出さむこと、念なしと

貞觀の帝

太宗（一二五

七年—一三〇

九年）のこと。

蝗を吞めるこ

とは、貞觀政

要に出づ。

白河關

磐城國西白河

郡。

思ひて、人にも知られず、久しく籠り居て、色黒く、日にあたりなして後、陸奥國のかたへ、修行の次に詠みたりとぞ披露しける。（古今著聞集）

一〇、桃李不言

一 桃李言ハザレドモ、下、自ラ蹊ヲナス。（史記）

一 水、至ツテ清ケレバ、魚ナシ。人、至ツテ察ナレバ、徒ナシ。

（漢書）

一、瓜田ニ、履ヲ納レズ。李下ニ、冠ヲ整サズ。（交選）

一、道邇シト雖モ、行カザレバ至ラズ。事小ナリト雖モ、爲サザレバ成ラズ。（荀子）

行カザレバ
至ラズ

- 一 恆産ナキ者ハ、恆心ナシ。(孟子)
- 一 心ハ小ナランヲ欲シ、志ハ大ナランヲ欲シ、智ハ圓ナランヲ欲シ、行ハ方ナランヲ欲ス。(文子)
- 一 普天ノ下、王土ニアラザルハナク、率土ノ濱、王臣ニアラザルハナシ。(詩經)

一一、木蓮薫る溪谷

私は、内金剛の代表的溪谷として、萬瀑洞を推すに躊躇せぬが、密林に蔽はれた、最も幽邃な溪谷としては、まづ、靈源洞を挙げなければならぬ。別して、かの岐路から、望軍臺の下、水簾洞の邊に達する、二三十町間の峽谷は、眞に、幽邃の極致

内金剛
朝鮮江原道金剛山。

である。私は、この峽谷を、別に、水簾洞峽谷と名づけたい。

この峽谷には、絶頂より轉落した、二丈三丈の大きさを有する、角の磨滅した巨岩が、累累として横はり、これを受けて居る地盤も、流水の磨削作用によつて、鏡のごとく研ぎ出された花崗盤で、急湍は、障害物のない限、その上を、音もなく滑り、轉石に遮られては、或は激し、或は、その下を潛り、飛瀑ともなり、深潭ともなつて、千百の水の美觀を構成する。しかも、その上は、常に、鬱蒼とした老樹に蔽はれて居るので、その幽邃は、多分に、神祕の色彩を加味して居る。時には、また、陰濕の溪間を好む山木蓮が、水に臨んで、大きな、純白な花をつけ、谷中、その香に満ちて居ることがある。この花は、一輪、手に取つて

嗅げば、強烈な香に堪へぬほど、鋭く、嗅覺を刺激するが、それが、梢に咲いて居ると、えならぬ香氣を、谷に漂はせるのだ。幽逕に、人なく、獨、水聲、禽語を聞く時、いづこともなく、薰り來る、この木蓮の、妙なる香氣が、この谷に與へる、靜寂の感じは、その境に臨まぬ者の、容易に想像し得ぬところであらう。

私達は、溪流を離れては、密林に入り、密林から、また、溪流を横ぎりつつ進む。樹木は、おもに、樅、檜、朝鮮松、杜松、楓樹等に、出會ふのであるが、斧斤の、嘗て入らぬ森林で、下草には、躑躅や、大きな羊齒があり、多くは、朽木、枯葉でうもれた中に、纔に、山僧の通ふ細逕が、覺束なくも通じて居る。往往、日の目を漏さぬところがあつて、太い葛蘿が、大蛇のやうに垂れ、何百年

かを經た老木が、自然に倒れ、古いものは、形を留めぬまで腐朽し、新しいものは、谷に横はり、或は、行手の道を塞いで居るなど、さながら、原始的風光で、踏んで行く枯葉の音にも、自然の私語を聞く心地がする。

この邊には、また、縞栗鼠が多く、不意の侵入者に驚きながら、半身を起して、木の枝、岩角から、ぢつと、私等を守つて居る。栗鼠は、外金剛でも見たが、樹木の多いだけに、この谷が、一番多いらしい。栗鼠の外の動物は、あまり見當らない。杜鵑は、時時、谷を掠めて鳴き過ぎ、山鳩の遠音が、處處で聞かれた。

水簾洞までは、よほどの上りで、そこに行くには、可なりの難所を越えねばならぬ。併し、そこまで行き著くと、誰も、思は

ず、行手に展開する美觀に見取れずには居られない。そこには、二百尺程の長さに、約四十度の傾斜面をなして居る、白色を帯びた、光澤のある花崗岩が、溪一杯の一枚岩となつて、その上を、浅い、水晶のやうな水が、四五尺の幅に、波頭のやうな紋様を、順次に畫きながら、音もなく押し擴りつつ滑つて居るので、水簾の名が、如何にも相應しく、さながら、造化の手が、永遠に、小歇もなく、それを繰り出して居るやうに見える。この水は、廂のやうに突き出て居る、大きな岩の下に流れ込むので、上部の落口には、徑三尺、深さ六尺ほどの、規則正しい、壺の形をした、自然の穴が穿たれ、一度、そこに落ち込んだ水が、渦巻きつつ流れ出て居るのも一奇觀で、殊に、楓の枝が、面白

く、その上にさしかかつて居るなど、上から見ても、下から見ても、如何にもいい構圖が出来て、この瀧に、繪のやうな感じを與へる。(菊池幽芳—朝鮮金剛山探勝記)

一一一、文字

我が國にて、普通に用ゐる文字には、漢字と和字と假名との三種類がある。

漢字は、支那から傳つたもので、その字體には、古文、篆書、隸書、楷書、行書、草書の六體があるが、普通、印刷などに用ゐるのは楷書である。然るに、等しく、楷書といふ中にも、古文、篆、隸より、直接に變化し來つた正體の楷書の外に、いはゆる俗字、お

よび、略字と稱するものがある。例へば、閒、鄰、救、窮、攜、牀、腳は正體で、間、隣、勅、窮、携、床、脚はその俗字、邊、澤、聲、亂、實、體、當は正體で、辺、沢、声、乱、実、躰、當はその略字である。俗字や略字も、既に、久しく慣用せられたものは、なまじひに、奇古な正體よりも、實用上便利であるが、ちやんと書いた書物などを讀む爲には、その正體をも知つておく必要がある。

その俗字や略字は、勿論、支那の文字の、稍變化したものであるが、和字は、全く、日本で作つたものである。働、風、風、峠、躰、躰、込、辻などのやうに、漢字に倣つて、新に、字形を作つたもの、伽、咄、掟、桎、椿、沖、萩などのやうに、漢字にも、この通の字形はあるが、全く、別の意味に用ゐたもの、杯、梓、詫、溶などのやうに、漢字

の一部分を改作して、他の意味に用ゐたもの、および、腺、哩、吋、種、疋などのやうに、西洋の醫學や、數學の入つて來てから、新に作つたもの、これ等は、皆和字である、これ、亦、一概に、俗字として排斥すべきではない。

古文	上	下	左	右
篆書	上	下	左	右
隸書	上	下	左	右
楷書	上	下	左	右
行書	上	下	左	右
草書	上	下	左	右

大凡、奈良朝の末から、平安朝の前半にかけて、一般に用ゐるに至つたものである。平假名は、漢字の草體を、更に簡易にしたもの、片假名は、漢字の偏、旁、冠などを取つて作つたものである。假名は、唯音を表すのみで、意味を表すことのないのが特色で、その性

質上、漢字や和字よりは、寧羅馬字に近いのである。

以上三種類の文字の中で、假名は、音を表すのみである。和字は、概して、訓のみで、音はない。然るに、漢字には、音と訓と、二様のよみ方があつて、その音にも、訓にも、様様の種類がある。

まづ、音に就いていふと、行狀、行李、行燈、經文、經書、看經、京師、南京の行、經、京の如きは、それぞれ異なつた音で讀まねばならぬ。その行狀、經文、京都の類は、いはゆる吳音で、日本に、最も早く傳つた爲に、佛經に關する語や、普通語に、頗る廣く用ゐられてゐる。行李、經書、京師の類は、所謂漢音で、唐の文化が、盛に輸入せられた時代に、朝廷の獎勵によつて流布したものであつて、儒書は、多く、これを用ゐて讀むことになつて

ゐる。行燈、看經、南京の類は、宋以後に傳つた音で、唐音と稱してゐるが、唐時代の音といふ事ではなくて、ただ、唐土の音といふ意である。但、この種類の音は、極めて稀に用ゐられるのみである。その他、北京、廣東、上海などの如く、現代の支那音を用ゐることもあるが、これは、唯、本邦と交通頻繁な土地の名などに、僅に用ゐられるのみである。

この唐音や、現代の支那音も、かの地の發音に比べると、既に訛つてゐるのである。吳音は、支那の南方の音、漢音は、支那の北方の音を傳へたものであるが、原音のままではなくて、餘程變化してゐるのである。

訓にも、種種の種類がある。漢字一字に、國訓を附したものの、

例へば、日、月、山、川、草、木の類、漢字二字の熟語に、國訓を附した
もの、例へば、從弟、伯母、海苔、所以の類、或は、これに、外來語の訓
を附した、隧道、燐木、唧筒、麪包の類、これ等は、皆、漢字、本來の意
義に隨つて、訓讀するものであるから、正訓といふ。然るに、子
丑、寅、卯、辰、巳の如き、草臥、七夕、團扇、流石に、五月蠅しの如き訓
は、漢字、本來の意義とは、多少異なつてゐるが、相似たところ
があるから、これを當てたのであつて、かかる種類のものを、
意訓といふ。

漢字には、以上の如く、種種な讀方がある。されば、今、ある漢
字を讀む時に、これを音讀すべきか、訓讀すべきか、或は、如何
なる音、如何なる訓にて讀むべきか、頗る疑しい場合もない

ではないが、大抵は、國語の習慣や、前後の關係や、送假名等に
よつて、判定することが出来る。その中で、漢語で出來た熟字
は、音讀する時は、二字ともに音讀し、訓讀する時は、二字とも
に訓讀するのが正則である。ただし、國語と漢語と連合して、
熟字となる時は、敷地、奧行の如く、音訓を交へて讀むことが
ある。又、正則ではないが、重箱、合羽、團子、出立のやうに、音の下
に、訓を連ねて讀むこともあり、湯桶、小僧、身分のやうに、訓の
下に、音を連ねて讀むこともある。

これを要するに、言語、文字のことは、一に、習慣によつて定
るもので、久しい習慣となつたものは、正則でないものでも、
亦、これに従はねばならぬ。(佐佐政二)

安部野

攝津國東成郡

霜月二十六日

正平二年

脱ぎ更へさせて療せしむ

一三三 如意輪堂

安部野の合戦は、霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋より堰き落されて、流るる兵五百餘人、かひなき命を、楠木に助けられて、川より引き上げられたれども、秋の霜、肉を破り、曉の氷、膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠木、情ある者なりければ、小袖を脱ぎ更へさせて、身を暖め、藥を與へて、疵を療せしむ。かくの如く、四五日、皆いたはりて、馬に騎る者には、馬を引き、物の具うしなへる人には、物の具を著せて、色代してぞ送りける。されば、敵ながら、その情を感ずる人は、今日よりのち、心を通ぜむことを思ひ、その恩を報ぜむとする人

四條繩手

河内國中河内郡

兩度の合戦

八月の藤井寺合戦、十一月の住吉安部野の合戦。

將軍

足利尊氏。

左兵衛督

同直義、二九六六年—二〇一二年

師直

本姓高階氏、一〇二〇—一〇二一年

師泰

一〇二〇—一〇二一年

淀

山城國久世郡

四條中納言

隆資

藤原氏。南朝

は、やがて、彼の手に屬して、のち、四條繩手の合戦に、討死をぞしける。

さて、今年、兩度の合戦に、京勢、むげにうち負けて、畿内、多く、敵の爲に侵し奪はる、遠國、また蜂起しぬと告げければ、將軍、左兵衛督の周章、ただ、熱湯にて、手を洗ふが如し。今は、末末の源氏、國國の催勢などを向けては、敵ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國、中國、東山、東海、二十餘國の勢をぞ向けられける。

京勢、雲霞の如く、淀、八幡に著きぬと聞えければ、楠木帶刀正行、舍弟正時、一族うち連れて、十二月二十七日、吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、疴弱の身

候へば―仕
つて候ふ
龍顔
天子の御顔に
いふ。史記に
見ゆ。

南殿
紫宸殿をい
ふ。諸殿の最
南にあるを以
てなり。

候ふ間、今度、師直、師泰に驅けあはせ、身命をつくし、合戦仕つて、かれらが頭を、正行が手に懸けて取り候ふか、正行、正時が首を、かれらに取られ候ふか、その二つの中に、戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて、いま一度、君の龍顔を拜し奉らむために、參内仕つて候ふと申しもあへず、涙を、鎧の袖にかけて、義心、その氣色にあらはれければ、傳奏、いまだ奏せざる前に、まづ、直衣の袖をぞ濡しける。

主上、すなはち、南殿なでんの御簾を、高く捲かせて、龍顔、ことに麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を、近く召して、以前、兩度の戦に勝つことを得て、敵軍に、氣を屈せしむ。叡慮、まづ、憤を慰する條、累代の武功、かへすがへすも神妙なり。大敵、いま、勢をつく

して向ふなれば、今度の合戦、天下の安否たるべし。進退、度にあたり、變化、機に應ずる事は、勇士の、心とする所なれば、今度の合戦、手を下すべきにはあらずといへども、進むべきを知つて進むは、時を失はざらむが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせむが爲なり。朕、汝を以て、股肱とす。慎んで、命を全うすべしと仰せ出されければ、正行、頭を、地につけて、とかくの救答に及ばず、只、これを、最後の參内なりと思ひ定めて、退出す。

正行、正時、和田新發意、舍弟新兵衛、同紀六左衛門、子息二人、野田四郎、子息二人、楠木將監、西河子息、關地良圓以下、今度の軍に、一足も引かず、一所にて、討死せむと約束したりける兵

百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば、討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を、過去帳に書き列ねて、その奥に、

かへらじと、かねて思へば、梓弓、

なき數に、いる、名をぞとどむる。

と、一首の歌を書き留め、逆修のためとおぼしくて、各鬢髪を切つて、佛殿に投げ入れ、その日、吉野をうち出でて、敵陣へとぞ向ひける。(太平記)

名をぞとどむる

一四、はれぬ雲

吉野の行宮ひて、うへのさめごとく、雲を

とどむりて、歌詠を侍りたるついでに、五月雨

とよみこそと詠ませしやむひける。

後醍醐天皇御製

都だよさびしくかりしを、はれぬ雲、

よ一野のおくは、五月雨の頃。

百首歌の中に、冷泉入道前右大臣

身の上を、たたら剥きて、思ひきは、

みそしのはるの、若たまりなれ。

霧中百首の歌よ、菅浦を。中務卿宗良親王

あやめひく、今宵を、つらや、思ひやふ、

みやくもこそ、枕たかむむ。

ばかりや
なるらむ

文貞公
藤原師賢。元
弘二年、北條
氏の爲に、下
總國に配せら
る。(一九六一
年—一九九二
年)

文貞公、あづまの方へ赴きは、
同ドやうに、
失せさるけり、
妙光寺内大母

あつちのたろに、
うきをいそぐ命と、

勢多の橋をすくとも、
権中納言具行

けふのこゝと思ふわが方の夢の世に、

あつちのつらさの長橋。

題しらす。大莊師在仲

故郷に、

あつちを語る、友やわらわむ。

(新葉和歌集)

一五、 讀書の選擇

Emerson
エマソン
亞米利加
の哲學者
(二四六
三年—二
五四二
年)

エマソンはいく、書を讀まば、最も適當なるもののみを讀
むべし。さらぬ群書の涉獵に、記憶力を徒費することなかれ
と。かの新聞、雜誌と、拙劣なる小説とのみを愛讀するものは、
エマソンのいへる、劣等なる群書に、記憶力を徒費するもの
なり。否、彼等にして、かかる劣等なる書籍の耽讀に、歳月を涉
りて、毫も、良好なる書籍に、趣味を覓むることを勉めずんば、
そは、常に、時間と記憶力との徒費のみにあらし、かかる讀書

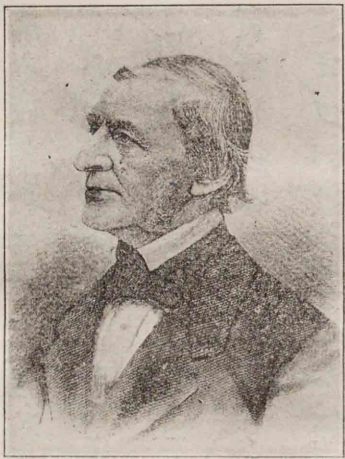
は、注意力を薄弱ならしめ、思想の清新を絶ち、氣象の煥發を妨げ、人をして、神餒ゑ、氣阻みて、頽然として、生氣なきに至らしむべし。

これを覺醒せんとするには、いかにすべき。エマソン、また教へていはく、「讀書の最良法は、かの、時間と紙とによりて製作せられたるものを措いて、直に、天然を讀むにあり」と。然り、誠に、汝の趣味の睡眠を自覺せば、暫く、その新聞、雜誌と、小説とを棄てて、名山、大川の間に、直に、秀麗なる天然の文學に接せよ、親しく、偉大なる審美の靈光に浴せよ。庶幾はくは、汝が趣味を覺醒せしむることを得んか。

庶幾はくは
—得んか

偉大なる文學は、偉大なる天然に近し、天然の爲すところ

は、天才の筆、亦、よく、これを爲すことを得べし。名篇、大作に親炙するは、恰も、名山、大川の間に逍遙するに似たり。されば、善



像 哲 ソ マ エ

良なる讀書は、よく、眠れる趣味識を警醒し、よく、これを啓發し、助成し、清新なる思想、靈妙なる筆力を涵養するものなりとせば、予は、目下の讀書界を警醒し、

指導すべき、唯一の急務は、これに、讀書の選擇を教ふるにありと信ぜんとす。

苟も、書を讀まんとせば、成るべく、優等なるものを選び、善きこと勿論なり。されども、最も優等なる書、即ち第一流の書

萬葉
萬葉集のこ

源語

源氏物語のこ

近松

名は門左衛門。淨瑠璃作者。二二二一年—二三八四年

は、天下、そもそも、幾何かある。今、單に、日本の文學書についていはば、萬葉の一部と、源語と、近松の作と、その他、なほ強ひて、二三を數ふるを得んも、一國の文學界の讀書を、この僅少なる書冊に限らんことは、殆ど、なし得べきにあらじ。否、かくの如きは、實に、予等が、偏狹固陋として、忌むところなり。

今、この偏狹と固陋とを脱して、よく、優等なる書に專なることを得んとせば、まさに、いかにすべきか。かのエマソンは、實行し得べき方法なりと稱して、左の三則を示しぬ。

まづいはく、一年を経ざる著作は、讀むことなかれと。蓋し、一年を経て、なほ、社會に忘れざるものは、或は、多少の趣味あるものならん。一年をだに經ずして、反故として投棄せら

るるものは、恐らくは、一讀の價值なきものならん。歲月の淘汰を待たずして、徒に、争うて、新版物を讀まんは、徒勞と時間とを賭して、文學通の虛名を博し得んのみ。

又いはく、有名ならぬものは、讀むことなかれと。こは、徒に、所謂珍本に蟻集することなからんことを教ふるなり。そもそも、名聲とは、多數の識者の鑑賞の結果にあらずや。その多數の識者の鑑賞に反して、ある機會のために、纔に、散佚を免れたる如き、價値の、比較的乏しき古書を、殊更に熟讀せんは、殆ど、これ、癡に類せずや。さる、いかがはしき勞力を費さんよりは、まづ、有名なるものを讀み盡せ。予等の眼前には、半生を、讀書に費すとも、なほ熟讀玩味する能はざるべき、許多の、有

名なる著作あるにあらずや。

又いはく、嗜好に適せざるものは、讀むことなかれ」と。極めて野卑なる嗜好の人を誤ることは、いづれの方面においても、われらの知るところなれども、前述の二條件に適合したる範圍において、その嗜好するところを求めば、蓋し、大過なきを得んか。ヒルは、更に、この條件を敷衍していはく、再度以上讀破することを欲せざる書は、讀むことなかれ」と。試に思へ、現時の讀書界が、よく熟讀玩味したる新出版物、そも、いくばくかある、讀者は、選擇を忘れ、作者は、推敲を忘れ、相率ゐて、没趣味の中に投ぜんとす。歎ぜざるべけんや。

故におもへらく、以上の三則は、讀書界の時弊を救ふべき

ヒル 米國ハル
Hill パート大
學教授。
推敲 字句を鍛鍊す
ること。唐の
賈島が、鳥宿
池邊樹、僧敲
月下門の句
を得、始推の
字を著けんと
し、又敲の字
を著けんとし
て苦心したる
故事に本づ

最好手段なりと。(佐佐政一—鶉衣評釋による)

一六、俳句評釋

春の水、山なき國を、ながれけり。

蕪村

春の水は、溫げに見ゆる春季の水をいふ。川にても、池にても、海にても、何にても宜し。此處は川なるべし。春の川水の、廣き野を、末遠く流るるを見渡したる景色なり。山なき國とあるを、若し、廣き野原とせばいかに。目前の景色は同じけれども、感じに、非常なる違あるべし。山なき國の方、遙に強き印象を與ふるが如し。舊派の人は、蕪村の句を好かねども、この句は、それ等の人にも賞美せらる。

鐘ひとつ、賣れぬ日はなし、江戸の春。 其 角

これは、其角の、最も特徴ある、豪放なる句なり。江戸の繁榮を、非常に誇大的に詠めるものなり。弔鐘は、一度鑄造すれば、千年も、萬年もあるべき物なれば、田舎などにては、弔鐘を造ることは、非常なる大事件なるが、江戸は、さる吝なる地にあらず。弔鐘さへ、毎日賣れぬ日はなしと、大言を吐きて、他國者の膽を拉ぎたる句なり。弔鐘といふ物を取り合はせたるを、勝れたる處とす。江戸の春は、江戸の春景色にて、春は、最も陽氣なる時候なれば、この句柄に相應するなり。

大原や、蝶の出で舞ふ、おぼる月。 丈 草

朧月夜に、大原の景色を見れば、一面に打ち霞みて、ぼんや

りとしたるに、色も何も、よく見えざれど、ちらちら、蝶の舞ふ姿が見ゆるとなり。この句を、師の芭蕉が見て、成程、これは佳き句なるが如し。しかし、蝶の舞ふは、いかがあらん。夜、蝶の出づることは、不自然にはあらざるかといひけり。然るに、作者の文章、現に、大原を通りて、この景色を見たりといひければ、芭蕉が、果して然らば、この句は、實に秀逸なり、佳句なり」と賞め稱へたりきといふ。夜、蝶が出て舞ふといふことが、大原の所柄にかなひて、神韻縹緲の趣を成せるなり。

五月雨を、あつめて早し、最上川。 芭 蕉

これも、有名なる句なり。最上川は、人も知る如く、羽前を流るる大河なり。奥羽地方といふ時は、何となく寂びたる感じ

最上川
羽前にあり。
日本三急流の
一。

の浮ぶを覺ゆ。其處に、五月雨の降りて、その五月雨を集めて、早く流れたりといふに、すさまじき水勢の、目に見えて、莊嚴なる句となれるものなり。

負うた子に、髪なぶらるる、暑さ哉。 その女

暑き時に、子を背負ふ、只、それのみにて、も、だくだく、汗は流るるを、その子は、背中にて、色色悪戯して、髪を毛をいぢり居るなり。うるさしといふことと、暑しといふこととを結び付けたるを手柄とす。その女は、流石に女俳人として、如何にも女らしき所に著眼したるものなり。男にては、かかる句は成り難からん。

あら海や、佐渡によこたふ、天の河。 芭蕉

これは、越後の國の海岸より、佐渡の島を望みて詠めるなり。日本海が、八朔頃のならひとて、非常に荒く立ち騒ぎ、浪音鞆と聞え、銀河は、横に、佐渡の上を流れてゐるといふ、極めて雄渾なる句なり。横たふの語、破格なれども、俳家にては、難とせぬなり。俳句の數は、何千萬と、數限なけれども、莊嚴なる點にて、この句を越すものは、恐らく、一句も無からん。海を詩題としたるは、西人に、多くあれど、かかる景色を、かく簡單に敘したるは、これ、亦無かるべし。

路問へば、一里一里と、秋のくれ。 蓼太

旅行する時は、屢、かかる目に遭ふことあり。大分、日暮にはなりたれど、いまだ、目的地に達せず、殊に、秋の夕暮は、日の暮れ

易きをや。心細き氣持を詠めるなり。一里一里とのとの使方に、注意あるべし。容易にいひ難きことを、能く、簡單に言ひ現したるものといふべし。

行く秋や、木ずゑにかかる、鉋屑。

文 草

何處の普請場より飛び來れるならん。鉋屑が、木の先にかかりをるなり。それが、風に吹かれて居る有様は、如何にも物寂しきなり。行く秋の寂しさに、如何にも旨く適ひたり。面白き所に著眼したるものといふべし。

旅に病んで、夢は枯野を、驅け廻る。

芭 蕉

句の意は、旅行中に、病氣にかかりたるが、追追重り來て、心は、夢現の境に彷徨ひ、夢心に、枯野を驅け廻るやうに感ずと

いふなり。この句、初は、旅に病んで、枯野をめぐる、夢心とありけるを、傍なる人にもいひあはせ、自分にも考へて、前の如く直したりといふ。作者が、この句を詠めるは、元祿七年十月の八日にて、その十二日には歿したるなり。重患にかかりて苦める中にも、この最後の句を、かくまでに推敲したりしを見れば、如何に、詩人が、斯道に忠實なりしかを知るに足らん。

(沼波瓊音)

一七、修善寺だより

拜啓。昨日は、雨の日ぐらし、無聊に困み、夕景、始めて、傘さして、川向の小山なる、頼家公の墓を拜し申し候。見る

頼家公
頼朝の子。北條時政のために、修善寺に幽殺せらる。
(二八四一年
一八六三年)

入り、ピントをあはせ候が、ひまどり候程に、水中の赤脚寒に堪へず、しかも、來浴者頻頻として、目障の邊に、著物を脱ぎはなしなど致し、始終、ピント安を妨害致され、技師の難澀、これに過ぎず候ひき。辛うじて、一照致し候へども、印畫の安否、甚だ心元無く存じ候。

それより、川下なる廣機の瀧に赴き、馬車屋の前なる阪道の中段に、機械を立て候處、畦下の馬の湯に上下する四足の往來ありて、屢、道を讓るべく、餘儀無くせらるるため、倥偬の間に、速寫機を拵りて、立ち退き申し候。

この寫眞修行の前、人の需に依りて、少少、蠹筆を揮ひ申し候。然るに、僻境の惡箋用ゐるべからずなど、不足を申し候處、亭主才覺して、紙門かみに貼りのこしの地紙を裁ち

て、持ち來り候に、居然たる、檀紙金砂子の好短冊を得候こそ、風流、この上なく、感心致し候へ。

二日の雨にて、椎茸出來候へば、味醂醬油の附焼に致し候。今は、春子のすがれにて、肉薄く、氣も、亦、微には候へども、山廚の佳味侮るべからず、平椀中、常に幅する所の陣笠の如き物とは、箸を同じうして、論ずべきにあらず候。本日は、食福の日にて、午後には、合宿の衆より、炒豆、草餅を貰ひ、夜に入りて、某氏より、新杵しんきの一折を贈られ候。胃病の人、毎に、餓鬼の如く候。幸に、食談の煩を咎め給ふことなかれ。草草不盡。尾崎紅葉一紅葉書簡

新杵
横濱の菓子
舗

一八、月雪花

春は花見、夏はすずみ、秋は月見、冬は雪見、夏はいはゆる三つの眺に、關係はないが、月夜の涼は、また格別である。

春の花見は、昔の大宮人にも、今の丁稚小僧にも、一年間の最大歡樂の時期である。芋栗を捧げて、月を祭る風俗、田園の收穫を終へて、勞苦を忘れる快樂は、一般國民的の雅興である。お月さまいくつの俚謠、雪よ、ふれふれの童歌、月雪花の風流は、赤子の時から教育せられて、われらの頭に沁み込んでいるのである。

それ故、月雪花を見て、美を感じるといふは、既に、多少、歴史的因縁の添つて居ることである。わが國の櫻花は、唐人も、高麗人も、うつくしといふに、違ないが、わが國民の感ずる所とは、大きな逕庭がある。米國人は、觀月といふことに關しては、殆ど、何の興味をも有つて居らぬ。われらは、子供の時から、月雪花で教育せられて、大きくなつた。月雪花を翫ぶといふ詩的教育的教育を受けたのである。

風流の眞義は、塵世を忘れることである。全く、塵世を忘れて、活動社會を離れることは、隱遁者の所行であるが、少くとも、皎皎たる明月、皚皚たる白雪、雲の如く、霞の如き花に對しては、これを眺めて居る間は、名譽に汲汲し、利慾に營營たる社會を忘れてしまふ。月雪花の功用は、美術と同じく、人を高

われらを
（して）一な
らしめる

尙にし、人を温雅にし、人を悠揚にするのである。
月雪花は、われらを神聖にし、われらを高尚ならしめる勢
力がある故に、われらは、月雪花を尊敬し、月雪花に、種種の美
徳を附加する。無情の物を有情化した上、更に、これを有徳化
するのである。月は、公平無私、靈瑩透徹、一點の汚なき者とし
て、光風霽月などといつて、君子人の心に比べられ、月を蔽ふ
雲は、その光明を掩ふものとして、小人、邪佞の徒になぞらへ
られるのである。雪は、その皎潔で、一點の塵がなく、凜烈なと
ころを見て、潔白な精神や、節操の高いことを聯想する。花は、
その爛漫たる美しさの、忽ち、風に散りゆくを惜んで、節義の
士が、いさぎよく、身命を抛つのに譬へる。月や、雪や、花や、靈あ

つて、皆、これらの徳を備へて居るが如く感ずるのである。古
人が、かく感じ來つたその儘を、われらは承け繼いで、われら
も、かく感ずるのである。

月雪花の眺を、恣にすることの出來ない民族は不幸であ
る。月雪花があつても、これに附加せられた傳説の無い國民
も、亦、人生の興味は尠い。われらは、月雪花に對して、古來の文
學を味ひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を知ることが出來
る。月雪花を通して、わが國民の歴史は、鬚髯として、眼前に浮
ぶのである。

今や、わが國は、世界の日本となつた。われらの足跡は、世界
の上に印せられねばならぬ。猿澤の池、鴉の海の上に照る月

鴉の海
琵琶湖の一
名。

アルプス
 歐洲中、
 最大なる
 山系。西
 北は、フ
 ランス、
 ドイツ、
 スウイス
 と、南は、
 イタリヤ
 との境を
 劃す。

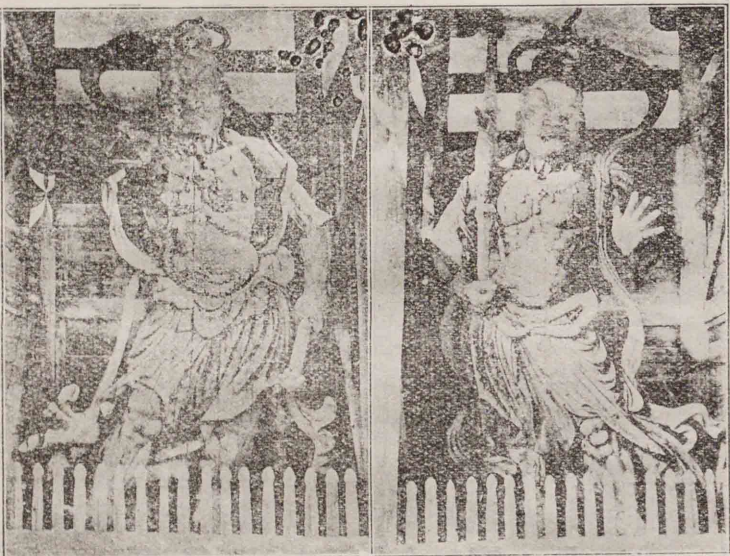
ばかりではなく、太平洋、印度洋の月をも見、埃及の金字塔下、支那の萬里の長城の月を詠めることもある。さては、アルプスの高峯の雪に攀づること、西比利亞の吹雪にさまよふこともある。滿洲征戰の迹には、日本の櫻も移し植ゑられ、紐育の公園には、天皇御賜の櫻もうわるといふ、この現代には、多くの新名所が起らねばならぬ。後人をして、俯仰感慨措く能はざらしめる佳話と文學とは、必ず、多く、新時代の人によつて遺されるであらうと思ふ。(芳賀矢一「月雪花」)

東大寺
 奈良市にあ
 り。聖武天皇
 の創建。華嚴
 宗大本山。

一九 東大寺

月がよいので、東大寺のあたりへ出かける。すくすくと、大

樹の立ちこめた境内の森には、月の光も流れかねて、陰森の



金 剛 密 迹

気が、煙のやうに迷うてゐる。このやうな宵に、木立の下路で、迷ひでもするものならば、きつと、鬼の落した蠱さじの係わ蹄なにかかつて、一夜、歩き廻つたところで、いつかな、路標を見つけたとも出来なからうと思はれる。

南大門は、撞木杖をつい

た翁のやうに、支柱にもたれて、そのすばらしい身體を、ちつと、空に擡げて居る。密迹、金剛の二力士は、この靜な宵にも、その、三丈に餘らうといふ體を起して、胸肉を張り、寶杵を揮うて、張肘に控へてゐる。銀の滴のやうな月あかりが、盜むやうに、窓にこぼれて、肩より、ふくら脛にかけて、半身に流れる。肉むらの色が、いかにも冷く、また美しい。ちつと見てゐると、いかめしい顔のどこやらに、追懷の「夢ごこち」が漂うて、靜に、と息をつくかのやうに思はれる。しかし、それも、ほんの一瞬間で、再び、劫初のかた、寶杵を揮うて、教法を護つてゐる金剛神の、居丈高な姿に歸つてしまふ。

佛殿の中門は閉されてゐる。百間にもとどかうといふ廻

永祿の昔云
云
永祿十年、松
永久秀の兵火
に罹る。

廊は、鳥の翼のやうに、左右に開いて、はては、見えなくなる。門の透間から、かいま見ると、金堂の扉は、靜に閉ぢて、屈託さうな燈明が、一つ瞬いてゐる。堂守の僧でもゐることか、どこやらに、囁くやうな響がして、それも、やがて消えてしまふと、あたりは、もとの靜寂になる。天人の足音も聞えさうな宵である。このやうな靜な夜を、ちつと、佛殿の闇に閉ぢ籠つて、毘盧舍那佛は、何を觀じてゐられるであらう。永祿の昔、佛殿が、炎上してより後、百三十餘の夏冬は、佛は、いつも露宿でいらせられたといふ。その頃は、夢のやうな、月夜の靜さに、醉心ちになるまでも、見とれてゐられたであらう。どことも知らず、十六夜薔薇のほふ卯月の宵に、春日野の木立より洩れる、なが

佐保川
添上郡佐保
村。
秋篠
生駒郡平城村
の古名。

し目のやうな月明に濡れながら、または、佐保の川瀬に、衣晒す女の唄も眠つた眞夜中、秋篠のあたりに沈み入る月影を眺めて、ひとり、法界の久遠を想ひ、閻浮の世の流轉を觀ぜられた姿は、どれ程美しく、又、偉大なものであつたか。今宵は、それらの追懷に、しみじみと、寂寞の盃を味うてゐられるかも知れぬ。

あたまの上で、鐘が鳴る。九時ださうな。さびれた舊都の宵は、もう、夜半過の心もちがする。(薄田泣菫—落葉)

二〇、諷諭

一、柑の木

栗栖野
山城國宇治郡
醍醐路の邊。

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に、尋ね入ることありしに、遙なる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉にうづもるる笥の雫ならでは、つゆ音なふものなし。閑伽棚に、菊、紅葉など折り散したる、さすがに、住む人のあればなるべし。かくてもあられるよと、哀に見る程に、かなたの庭に、大きな柑の木の、枝もたわわになりたるが、まはりを、きびしく圍ひたりしこそ、すこし事ざめて、この木無からましかばと覺えしか。(徒然草)

二、石清水詣

仁和寺にある法師、年よるまで、石清水を拜まざりければ、心らく覺えて、ある時思ひ立ちて、只一人、かちより詣でけり。

仁和寺
眞言宗。山城
國葛野郡にあ
り。

極樂寺、高良

男山の麓にある末寺末社。

極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て、歸りにけり。さて、かたへの人にあひて、年ごる思ひつること果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人毎に、山へ登りしは、何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へ参るこそほいなれと思ひて、山までは見ずとぞいひける。少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。(徒然草)

三、獅子狛犬

丹波に、出雲といふ處あり。大社を遷して、めでたく造れり。志太のなにかしとかや、しる處なれば、秋の頃、聖海上人、その外も、人、數多誘ひて、「いざたまへ、出雲をがみに。かいもちひめさせむ」とて、具しもていきたるに、各拜みて、ゆゆしく、信起し

丹波に出雲
南桑田郡大
社。
大社
出雲の國の大
社なり。

たり。御前なる獅子、狛犬、背きて、うしる様に立ちたりければ、上人、いみじく感じて、あなめでたや。この獅子の立てやう、いと珍し。深き故あらむと、涙ぐみて、「いかに殿ばら。殊勝の事は御覽じ咎めずや。無下なり」といへば、各怪みて、「まことに、他に異なりけり。都のつとに語らむなどいふに、上人、尙ゆかしがりて、大人しく、物識りぬべき顔したる神官を呼びて、「この神社の獅子の立てられやう、定めて、習ある事に侍らむ。ちと承らばや」といはれければ、その事に候ふ。さがなきわらはべ共の仕りける、奇怪に候ふことなり」とて、さし寄りて、据ゑ直して去にければ、上人の感涙、いたづらになりにけり。(徒然草)

二一、知己難

仲達
魏の名將司馬懿の字。(八三九年—九一一年)
祁山、渭水
支那甘肅省鞏昌府。
孔明
蜀の丞相諸葛亮の字。
玄徳
蜀の昭烈帝劉備の字。(八二〇年—八八二年)

朋友にして、知己ならざるものあり、知己にして、朋友ならざるものあり。否、知己は、敵人にも、これあるべきなり。かの仲達が、祁山、渭水の空營を按じて、天下の奇才なり」と叫びたるを見れば、かの孔明のためには、よき知己なりしにあらずや。孔明は、實に、二箇の知己をもてり。敵にては仲達、身方にては玄徳。

人は、何人とも、朋友となるを得べし。情と情と相接する日は、即ち、朋友の出で来る時なり。觸るれば、情を生じ、著すれば、情を生じ、久しければ、情を生じ、屢すれば、情を生ず。竹馬の友、同窓の友、同郷の友、同業の友、同位置の友、同臭味の友、友も、また、類多し。然り、天下、何人か、友ならざるものあらん。少し、心をとめて談話すれば、東京より、横濱に至るまでの汽車中にてすら、幾多の友人を得らるるにあらずや。

何人か—あらん
君ならでの歌
古今集に出づ。作者紀友則。
鍾子期、伯牙
支那戰國時代の初の人。
荆軻、高漸離
同時代末期の人。

知己に至りては、然らず。天下、千百の朋友を得るは易けれども、一人の知己を得るは難し。知己とは、何ぞや。われよりすれば、かれに知らるるなり。かれよりすれば、われ知るなり。君ならで、誰にか見せむ、梅の花、色をも、香をも、しる人ぞしる。これ、實に、知己に對する情なり。知己、實に難し。故に、一の知己を得れば、殆ど、一の生命を得たるよりも嬉しく、一の知己を失へば、一の生命を失ひしよりも悲し。鍾子期死して、伯牙、絃を絶ち、荆軻死して、高漸離、また、筑を撃たず。その心、まことに憐

楊巨源

中唐の詩人。

茫洋として
云云

韓愈が雜説に、龍梁此氣、茫洋窮乎玄間、薄日月。

むべきものあり。

楊巨源の詩にいはく、詩家清景在新春、柳嫩鶯黃色未勻、若待上林花似錦、出門皆是看花人、と。龍を見て、龍となす、難きにあらず。一寸の蛇を見て、はやくも、その雲を起し、霧を吐き、茫洋として、玄間を窮め、日月に薄るを知る、これ難きなり。知己のかたきは、そのいまだ發達せざる時において、他日の發達を卜することの難きにあり。その見れたる嬉笑怒罵の外に、隠れたる胸間の神祕を會得することの難きにあり。

人は、その半身以上は祕密なり。知己は、よく、鍵なくして、この祕密を知る。もとより、他の、われに向ひて語るを待たざるなり。語るを待ちて、これを知るが如き、これ、あに、知己ならん

子由

蘇轍。子由は字。穎濱と號す。(一六九九年—一七七二年)

是處青山云

この詩は七律にて、ここに擧げたるは、その後半なり。

いはんや—
おいてをや

賈生

前漢の賈誼。(四六一年—四九三年)

屈原

戰國時代の楚の人。名は平。文章家。(一三六二年)

周公

名は旦。周の武王の弟。

や。而して、知己の感は、また、兄弟の間にもあり。東坡曾て、獄に投ぜられて、重辟に處せられんとするを聞き、その弟、子由に贈りていはく、是處青山可埋骨、他年夜雨獨傷神、與君世世爲兄弟、又結來生未了因、と。その同胞の情、もとより篤し。いはんや、これに重ねるに、雙雙知己の恩愛を以てするにおいてをや。死後、なほ兄弟となり、その未了因を繋がんといふ。世の兄弟にして、かくの如き知己の感あるもの、古往今來、それ、いくばくぞ。

知己は、敵人にあるのみならず、生面の人にもあり。或は、古人に對してもあり。知己の交感は、時を問はず、處を論ぜず。賈生が、屈原を慕ひ、孟軻が、孔子を慕ひ、しかして、孔子が、周公を

スキピオ
ローマの
名將。(四
二六年—
四七七
年)
Scipio

慕ひて、われまた、夢に、周公を見ず」といひしが如き、その言の濃到深切、感ずべきにあらずや。キケロいはく、余に對しては、スキピオ、なほ生けるなり。しかして、以て、常に生くべしと。嗚呼、宇宙茫茫、ただ、知己ありて、以て、繋ぐところあり。知己なくば、人生は、荒野のみ、荆棘のみ。

人は、知己のために、その憂苦患難を、ともにするを厭はず。甚しきは、その一身を投じて、知己のために、犠牲となるものあり。かれ等は、漫に、犠牲となるにあらず、實に、知己のために、犠牲となるなり。苟も、一の知己を得る、生命を捨つるも悔いず。いはんや、區區たる浮世の名利をや。魏徵が、人生感意氣、功名誰復論」といふ句は、實に、人の、深奥なる思想を吐露したるものなり。

人生の、最も清福なるは、知己を持てるにあり。朋友中、知己を持てるは、最も清福なり。しかして、その兄弟、姊妹、父母の中に、知己を持てるは、最も大いなる清福なり。それ、風雨の夜、兄弟、床を並べて、千古の懷を敘す。天下、また、これに優る清福なからん。(徳富蘇峯)

二二一 室鳩巢に與ふ

昨日の御報拜誦、驚愕、是非に及ばず候。然りといへども、火急の處に、御全家、御異狀なきことをば、この上なき御幸福と思し召さるべく候。ただ、多年御拮据なされて、求

床を並べて
蘇轍の詩に、
「逍遙堂後千
章木、常送中
宵風雨聲、誤
喜對床尋舊
約、不知漂泊
在彭城」。

買田問舎云

魏志、陳登傳に「劉備曰、君求田問舎、言無可采」。

四書

大學、中庸、論語、孟子。

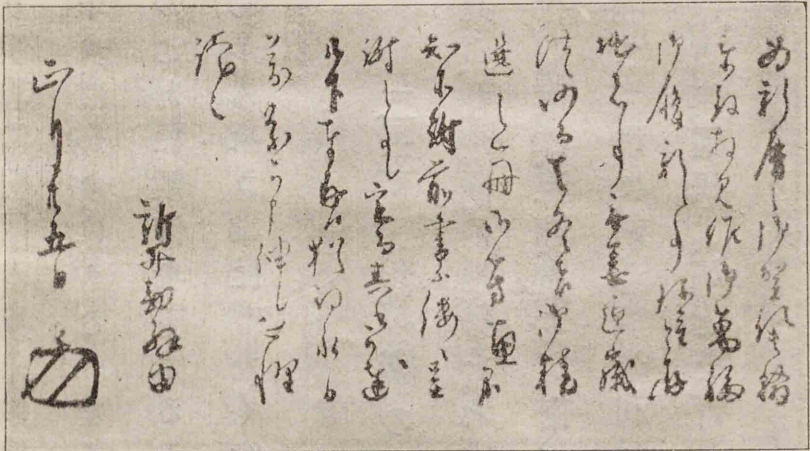
史記

百三十卷。司馬遷の撰。上軒轅より、下漢の天漢年中までの歴史。

漢書

百二十卷。班固の撰。前漢の歴史。

め得られたる御書籍と、御手録とのこと、承り候だに、心を苦め候。しかし、これも、身より外のもの、是非に及ばず候。貴兄、既に、御學業も成就候へば、これより後、書籍を頼みて頼まぬことに候。令郎、いまだ、御學問最中の御事に候へば、せめて、書籍をば、御貽し候御はからひのこと、あながちに、俗輩が、買田問舎等のことに比すべからず候。某家藏の書、もとより多からず候へども、二重になり居るもの、少少これあり候。書目の簿も、何の中にか入れ置き候ゆゑ、昨夜尋ね候ひしかども、知れず候ひき。されど、覺え候處は、四書、史記、漢書など、これあり候。すなはち、令郎へ、これを進ずべく候。この外の書、恩賜のもの、の外は、



新井白石筆蹟

何にても、御用次第御貸し申すべく候。御事も缺かせらるまじく候。この節も、手前の事、御物語申し候ひし如くなる故、十分なる御用には立ち候はぬこと、くちをしく候へども、いささか位は、身に及び候はんか。御心置なく仰せ下さるべく候。廉潔を立て候も、事により、相手にもよ

同門
鳩巢も白石も、共に水下順庵に學ぶ。秦風に云云詩經の秦風無衣の章に、豈曰無衣、與子同袍。

見よ―地勢を

り候。尋常同門も、兄弟の親に同じく候。況や、ただ同門と申すばかりにもこれなく、秦風に、與子同袍（トシヘシ）と申すは、このことに候。仰せ下さるる、すこしも、すこしも、御はづかしかるべき事にもなく候。早早。（新井白石）

一二三、わが國の海運

見よ、わが國の地勢を。北は、露領を控へ、西は、支那四百餘州に接し、南は、濠洲、および、南洋諸島に對し、東は、杳渺たる煙波を隔てて、遙に、南北亞米利加に鄰れり。地勢、既に、操舟に適すれば、古來、國民は、風濤を冒して、海上を闊歩したりしに、不幸にも、一時、鎖國政策の羈束に逢ひて、天馬伏櫪の歎に堪へざ

りき。されど、その、一度、既を出づるに當りては、勃然として、元氣を回復し、宇内を奔馳す。現今、わが海運の隆昌は、四五十年の經營に過ぎずと雖も、その然る所以を惟ふに、國初より蘊蓄したる素養の發揮せられたるに外ならず。

わが國民は、蓋し、神代より、造船、航運に努めて、海外に來往せり。素盞鳴尊は、浮寶を作りて、韓地に往來し、樹木を植ゑて、船材とし、彦火火出見尊は、無目籠を用ゐて、海國に渡り給ひきといふ。神武天皇の中原平定も、實に、舟師の力に頼り給ひしなり。舳艫相銜みて、韓國に驀進し、一舉にして、これを征服し給ひしは、神功皇后の偉績にして、爾來、かの國は、われに服して、久しく朝貢を怠らざりき。齊明天皇の朝、阿倍比羅夫は、

阿倍比羅夫
引田臣と稱す。

蝦夷を嚮導とし、舟師二百艘を率ゐて、肅愼を撃ちたり。その後、韓國は、叛服常なく、遂に、わが國は、意を、その綏撫に絶つに至りしかど、既に、善鄰の誼を結べる唐國とは、依然として、交際を厚くし、互に、玉帛聘問せり。宇多天皇の朝、唐の大亂に會ひて、遣唐使を廢せられしかども、商船の、私に、支那に航するものは、なほ尠からざりき。

義滿
（二〇一九年
一〇六八年）

足利氏の世に至りて、義滿が、明と修交せしが如き、八幡船が、支那近海の民を震慄せしめしが如きは、姑く措きぬ。その頃、西洋諸國は、航海の術、大いに發達し、葡萄牙、西班牙の二國、特に、海上に、權力を擅にし、競うて、東洋の經略に著目す。かくして、洋船の、わが國に來航して、貿易すると共に、邦人の、遠西

マドリード
Madrid
西班牙の
首府。

に渡航する者も少からず。鎮西の大友、有馬氏等の使臣は、葡船に搭じて、マドリードに、西班牙王に謁し、羅馬に、法王を拜して、歸朝したり。

支倉六右衛門
名は常長。二
二二一年—二
二八二年）
濱田彌兵衛
長崎の商人。
寛永年代の
人。
山田長政
通稱仁左衛
門。駿河の人。
（一二二九三
年）

徳川家康、通商に、志あり。外船の寄港せるを、欸待し、日本船の外航を奨励し、上下合體して、勢威を、海外に張らんとす。伊達政宗は、その臣支倉六右衛門を、羅馬に遣して、西洋諸國の形勢を視察せしめ、蒲生氏郷も、使節を、同地に派遣すること、前後四回に及べり。濱田彌兵衛は、臺灣に航し、わが民の財物を劫奪せる蘭人に逼りて、これを賠償せしめ、山田長政は、暹羅に渡りて、國事に、大功あり、國王の女を娶りて、封侯の榮を得たり。

ここに、外國交通の致命傷たりしは、天主教徒の非望の發覺にして、家康は、これより、異教の禁を嚴にせり。その後、尙禁を犯す者絶えざりしかば、家光は、遂に、峻酷なる鎖港の制を布きて、外人の來航を遏め、ただ和蘭のみ、他意なきを以て、明と共に、長崎一港に限り、船舶の數を定めて、貿易することを許し、曩に許可したる朱印船をも停めて、邦人が、海外の渡航を許さず。又、五百石積以上の船を製することを禁じたり。敢爲冒險、東海、南洋に馳驅して、葡、西二國と角逐したる國民の精神は、この制に桎梏せられて、萎靡沈滞二百餘年。海運も、纔に、江戸、大阪を中心とする、近海の漕航に止るに至れるぞ、是非もなき。

至れるぞ一
是非もなき

ペリー
北米合衆國の水師提督。嘉永六年六月、浦賀に來る。
Perry
（二四五）四年一二月
（二四八）年

岩崎彌太郎
（二四九）二年
（二五九）年

ペリーの來訪は、國民の懶眠を覺醒する警鐘なりき。幕府は、世界の趨勢に鑑みて、大船製造の禁を解き、歐米諸國と、通商假條約を締結し、又、外國渡航の禁を廢す。かくして、幕末の世、内外の交通、更に興りて、以て、明治維新に及べり。

明治政府は、開國進取を以て國是とし、廢藩と共に、幕府諸藩の所有船を集め、これを、民間に貸し下げて、汽船會社を起さしむ。即ち、日本國郵便蒸氣會社にして、わが國における、航洋汽船會社の嚆矢なりき。この會社は、内部の紛擾と外船の競争との爲に、久しからずして、瓦解せしが、土佐の岩崎彌太郎、別に、三菱會社を起して、海運の業を營みしに、功績、頗る揚り、社運隆隆として、榮えたり。後、共同運輸會社起りて、これと

對抗し、頡頏して、相下らざりしが、數年ならずして、競争の弊に堪へず、合併して、日本郵船會社と稱せり。これと前後して、又、大阪商船會社の設立あり。二社、共に、今、盛に、漕運に従事せり。

今や一に至れり

明治における海運發達の急速なるは、眞に、人をして驚倒せしむ。日露戦争の起れる明治三十七年の海運力を以て、その元年のに比するに、噸數、五十四倍餘の増加を見たりといへば、その後の進歩も、亦想見するに足れり。今や、わが汽船は、東南兩洋より進んで、歐米に、航路を開き、煙を噴き、潮を蹴て、天下を横行し、世界の汽船會社と對立して、堂堂として、優等の位置を占むるに至れり。地理を以て比較すれば、わが國

いまだ一達せず

は、恰も、東洋の英國なり。英國は、海運を以て、邦家の生命とし、これに倚つて立ち、これに依つて強盛なるに、われは、いまだ、その道程の半にも達せず。前途は遠く、希望は大いなり。勉めざるべけんや。(大隈重信一開國五十年史による)

二四、自警

予、年二十以後、すなはち知る、匹夫も、一國に繋るあるを。三十以後、すなはち知る、天下に繋るあるを。四十以後、すなはち知る、五世界に繋るあるを。

日晷、一たびうつれば、千歳、再來の今なし。形神、すでに離るれば、萬古、再生の我なし。學藝、事業、あに、悠悠たるべけん

や。

人の己を譽むる己において、何をか加へん。もし譽に因りて、自ら怠らば、即ち、反りて損せん。人の己を毀る己にお

いて、何をか損せん。

もし、毀によりて、自

ら強うせば、即ち、反

りて益せん。

身に、規矩を行は

ば、即ち、嚴ならざる

べからず。これ、己を治むる方なり。己を治むるは、即ち、人を

治むる所以。人に、規矩を待たば、即ち、嚴に過ぐべからず。こ



佐久間象山肖像及筆蹟

余年二十以後
乃知匠夫有
繫一國三十
以汝乃知有
象天下四在
後乃知有繫
五世界
象山筆蹟

れ、人を安んずる道なり。人を安んずるは、即ち、自ら安んずる所以。

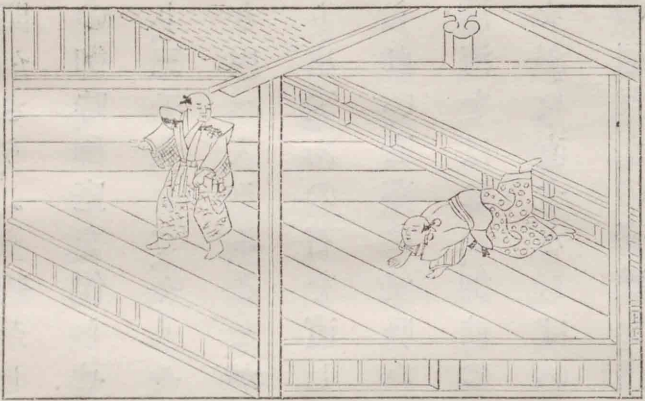
書を讀み、學を講じ、徒に、空言をなし、當時の務に及ばざるは、清談、事を廢すると、一間のみ。(佐久間象山一省曾録)

二五、膏藥鍊

アト「罷り出でたる者は、鎌倉方の膏藥鍊でござる。身共程の、膏藥の上手はあるまいと思ふ所に、聞けば、都にも、膏藥の上手があると申すによつて、鍊り競べて見ようと思つて、上るところでおりやる。シテ、さては、鎌倉の膏藥鍊とは、わごりよがことか。身共も、其方がいふ如く、鎌倉の膏藥鍊のこと聞き

及んで、只今、鎌倉へ下るところでおりやる。アト、さては、左様
でおりやるか。何と、某の膏藥には、系圖があるが、わごりよの
膏藥にも、系圖があるか。シテ、成程、この方にもある。其方から
語つて聞かしやれ。

アト、心得た、語らう。よう聽かしまして。さても、昔、頼朝の御代に、
生暖といふ名馬が、虚空をさして、とつて出た時に、御前なり
ける諸大名、やれ、あれを止めよ、止めよ」と仰せられたれど、誰
あつて、止むる人もなかつた。その時、某が先祖の祖父おぢ罷り出
で、あの馬を、この膏藥にとどめて、御目にかけてませう」と申し
た。頼朝を始め、諸大名、何として、膏藥でとどめられうぞ」と仰
せられ、一度に、どつと笑はせられた。さりながら、止めさへす



るなら、止めさせい」と仰せ出された。畏つて候ふと、先祖の祖
父、膏藥を、指の腹に、芥子粒程付け、息
を、ほつとしかけ、かのかける馬に向
つて、あの馬吸へ、吸へ」と申したれば、
何が、膏藥の強いに引かれて、かけ出
たる馬が、じたじたじたじつと吸ひ
寄せられた。頼朝見給ひて、か程の膏
藥に、銘が無うてはなるまい。銘を取
らせう」とあつて、馬を吸うたる膏藥
なれば、鎌倉一の馬吸ばま膏藥と下され
てこのかた、某が膏藥は、鎌倉に、隠はおりない。

平相國淨海
平清盛。

シテ、これも、よほどの系圖ぢや。さらば、身共の系圖を語つて聞かさう、より聽かしめ。アト、心得た。シテ、さても、平相國淨海の御時、御庭を作らせられしに、立石になる石を、都の北山より、三千人して、やうやう、北の門まで引き寄せたれば、御門より内へ入ることにならなんだ。その時、某の先祖の祖父罷り出で、あの石を直したう思し召さば、所をさいて仰せ付けられい。膏藥にて吸ひ寄せて、御目にかけうと申した。その時、淨海をはじめ、御前の人人、一度に、どつと笑はせられた。さりながら、直すならばいひ付けいと仰せ出された。その時、先祖の祖父、かの膏藥を、透項香程、指の腹に付け、息を、ほつとしかけ、大石に對ひ、あの石吸へ、吸へといひければ、かの大石が、膏

藥に引かれて、じりじりじりじつと吸ひ寄せられた。淨海を始め、おのおの、さても不思議なる膏藥かな。か程名譽の膏藥に、銘が無うてはかなふまいと仰せられ、石を吸うたる膏藥なれば、天下一の石吸膏藥と下されてよりこのかた、身共の膏藥は、天下に、隱がおりない。

アト、誠に、これは、よほどの系圖ぢや。互に劣らぬことぢや。いざこの上は、藥味をあはせて、吸ひ合はせて見ようか。シテ、それがよからう。何と、わごりよが藥味は、何何が入るぞ。アト、されば、身共の藥味は、むづかしいものが、品品いる。まづ、地を走る神鳴、空を飛ぶどり龜、木になつた蛤、こんな物があるは。シテ、身共が藥味も、いろいろ、大切な物がある。白鳥、赤犬の生膽、

三足の蛙、こんな物がいるは。シテ、いざ膏藥を吸ひ合はせて見よりか。アト、一段よからう。拵へさしませ。シテ、鼻の先に付けて、吸ひ合はせう。何と、よいか、よいか。アト、拵へはよいぞ。さらば、ちと、鎌倉へ向ふぞ。シテ、いやいや、引くことはなるまいぞ。さても、さても強い膏藥ぢや。さらば、ちと、都方へ引かうぞ。アト、いやいや、都へはなるまいぞ。さても、さても強い膏藥ぢや。これから、鎌倉へ、一引に引いてくれうぞ。シテ、いやいや、なるまいぞ。さても、さても、これも強い膏藥ぢや。それなら、都方へ、一引に引かうぞ。やあやあやあ。アト、これはならぬぞ、ならぬぞ。何とするぞ、何とするぞ。シテ、そりや、引きこかした。さあ、勝つたぞ、勝つたぞ。アト、いやいや、今の中では知れぬぞ。も一度、

勝負をせい。やるまいぞ、やるまいぞ。(狂言記)

二六、浮花

八月の或日である。五時に起床、朝飯をすましてから、例の如く、庭に出た。黒い庭を一めぐりして、花園に行くと、數數の草花が、仲よささうに櫛比隣接して、露ながらに、朝日を迎へてゐる。何ともいはれぬ愛らしさ、賑やかさに、ふと思ひついたのは、いろいろの花を、澤山、水盤に浮べたら綺麗だらうといふことであつた。早速、鉢と籠とを持つて来て、花びらを集める。それから、座敷にはひつて、徑一尺ばかりの古伊萬里の鉢に、水を湛へて、紅黄白紫と、段段に點じて見た。實に綺麗で

ダリヤ
Dahali

枝ながら見よ

古今集、秋下、詠者不詳「萩の露玉にぬかむ」とればけむよし見む人は枝ながら見よし。

大原

山城國愛宕郡。

寂光院

大原村大字草生にあり。天台宗。延暦寺別院なり。

ある。紅蜀葵の、直徑四寸餘なる大輪を中心として、ダリヤ、蝦夷菊、桔梗、撫子、睡蓮等の、中位に大きいことから、孔雀草、矢車草、茄子、胡瓜、大角豆を経て、露草、藤袴、萩、女郎花等の細いのに至るまで、凡三十種ばかり、小い陶器の湖の中に、妍を競つた有様は、實に、目も覺めるばかりの美しさであつた。

自然の樂み方にも、いろいろあるなと考へつつ、枝ながら見よと云つた、古人の自然的風流などを偲びつつ、しばらく眺めてゐる中に、ふと、臨濟の一法友から聞いたことのある、洛外大原の寂光院の浮花の事を思ひ出した。つづいて、壇の浦に於ける平家滅亡の折の海上の光景を思ひ浮べた。大原の寂光院では、鐵鉢に、水を盛り、枝も葉も附かぬ花びらを浮

女院

建禮門院。高倉天皇の中宮。安徳天皇の御母。(一八一五年—一八七三年)

新院

崇徳上皇。左大臣藤原頼長(一七八〇年—一八一六年)

べて、佛に供するといふことであるが、それは、何の意味であらう、如何なるいはれに因るのであらう、私は知らないけれども、この謎のやうな供花の法は、或は、平家の公達、女房達が、壇の浦の波の上に、花と散つた末期の光景を象徴してゐるのではなからうか。緋の袴を召した女院の、氣高い御姿を繞つて、數多の女房達の、水に浮んだ光景は、紅蜀葵の、大きな赤い花をめぐつて、桔梗、朝顔、露草などの浮いて居るのに似てはゐなかつたらうか。(五十嵐カ―我が書翰)

二七、爲朝の軍議 その一

新院は、齋院の御所より、北殿へ遷らせ給ふ。左府は、車にて

父子五人
忠正と、その
子長盛、忠綱、
正綱、通正。
爲義

源義親の子。
檢非違使尉と
なり、六條堀
川に住みし故
に、六條判官
といふ。この
時年六十一。
(一七五六年
一八一六年
年)

父子六人
爲義と、その
子頼賢、頼仲、
爲宗、爲成、爲
仲。
鎮西八郎爲
朝
この時年十
八。(一七九九
年一八三〇
年)

参り給ふ。白河殿より北、河原より東、春日の末にありければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に門二つあり。東の門をば、平馬助忠正承つて、父子五人、竝に、多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて、固めたり。西の門をば、六條判官爲義承つて、父子六人して、固めたり。その勢、百騎ばかりには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附いて、多分は、内裏へ参りけり。ここに、鎮西八郎爲朝は、われは、親にも連るまじ、兄にも具すまじ。功名不覺も紛れぬやうに、只一人、いかにも強からむ方へさし向け給へ。たとひ、千騎にもあれ、萬騎にもあれ、一方は射拂はむざるなり」とぞ申しける。依つて、西河原表の門をば固めたり。北の春日表の門をば、左衛門大夫

家弘
平氏。

家弘承つて、子供具して、固めたり。その勢、百五十騎とぞ聞えし。

抑、爲朝一人として、殊更大事の門を固めたること、武勇、天下に許されし故なり。件の男、器量、人に超え、心、飽くまで剛にして、大力の強弓、矢つき早の手利なり。弓手の肘、馬手に四寸延びて、矢束をひくこと、世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも、所を置かず、傍若無人なりしかば、身に添へて、都に置きなば、悪しかりなむとて、父不孝して、十三の歳より、鎮西の方へ追ひ下すに、豊後の國に居住し、尾張權守家遠をめのととし、肥後の國の阿曾平四郎忠景が子、三郎忠國が婿になつて、君よりも給らぬ、九國の總追捕使と號して、筑紫を従へむ

鎮西
筑紫をいふ。

としければ、菊池、原田をはじめとして、所所に、城を構へて、立て籠れば、その儀ならば、いで落して見せむとて、いまだ、勢も附かざるに、忠國ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末より、十五の歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十箇所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術、人に勝れて、三年が内に、九國を、皆攻め落して、みづから、總追捕使に押しなつて、悪行多かりけるにや、香椎の宮の神人等、都に上り、訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、徳大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて、宣旨を下さる。

源爲朝、久住、宰府、忽諸、朝憲、威背、綸言、梟惡、頻聞、狼藉、尤甚。早可令禁進其身。依宣旨執達如件。

香椎の宮
筑前國糟屋郡
にあり。今官
幣大社。

宰府

太宰府の略。
筑前國筑紫郡
太宰府村に、
その遺址あり。

然れども、爲朝、尙參洛せざりければ、おなじき二年四月三日、父爲義を解官せられて、前檢非違使になされけり。爲朝、これを聞きて、親の科に當り給ふらむこそあさましけれ。その儀ならば、われこそ、いかなる罪科にも行はれむずれとて、急ぎ上りければ、國人共も、上洛すべきよし申しけれども、大勢にて罷り上らむこと、上聞穩便ならずとて、形の如くにつき従ふ兵ばかり召し具しけり。傅子の箭前拂の須藤九郎家季、その兄隙間數の悪七別當、手取の與次、同じき與三郎、三町礫の紀平次大夫、大矢の新三郎、越矢の源太、松浦二郎、左中次、吉田兵衛、打手の紀八、高間三郎、同じき四郎をはじめとして、二十八騎をぞ具したりける。依つて、去年より在京したりしを、

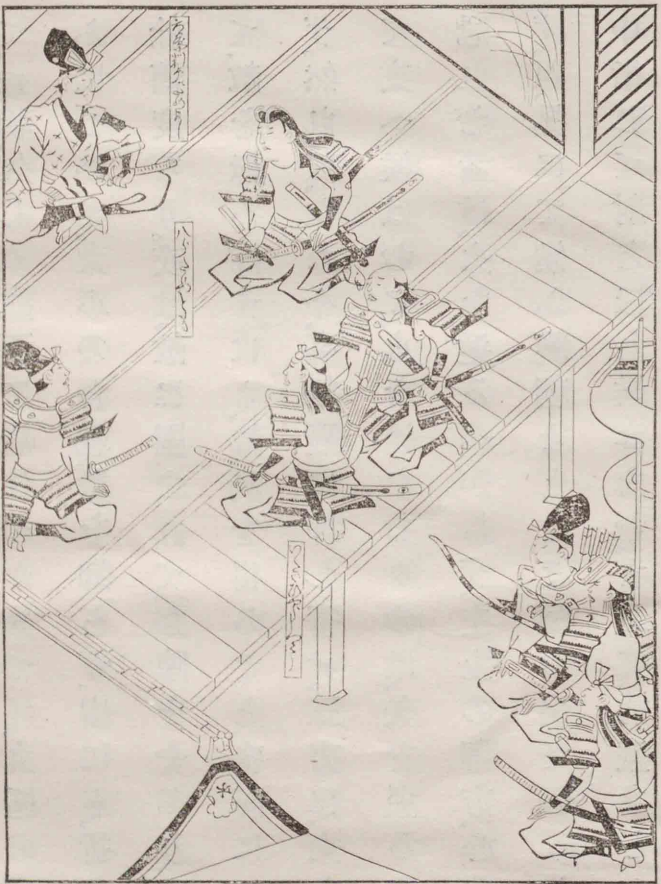
父、不孝をゆるして、今度の御大事に召し具しけるなり。

二八、爲朝の軍議 その二

爲朝は、七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが、紺地に、色色の絲を以て、獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以てをどしたる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを著るままに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞆入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて、鉞打つたるに、三十六さしたる黒羽の矢負ひ、兜をば、郎等に持たせて、歩み出でたる體、樊噲も、かくやと覺えて、ゆゆしかりき。はかりごとには、張良にも劣らざれば、堅き陣を破ること、吳子、孫子が難し

吳子、孫子
ともに周末の
軍畧家。吳子
名は起、魏の
文侯の臣、孫
子名は武、吳
王闔閭の臣。

養由
名は基、周末
の楚の將。



板本保元物語挿繪

をはしる
けだもの、
恐れずと
いふこと
なし。上皇
をはじめ
まゐらせ
て、あらゆ
る人人、音

にきこゆる爲朝見むとて、擧り給ふ。

左府すなはち合戦の趣はからひ申せと宣ひければ、畏つて爲朝久しく、鎮西に居住つかまつて、九國の者ども従へ候ふについて、大小の合戦、數を知らず。中にも、折角の合戦、二十餘箇度なり。或は、敵に圍まれて、強陣をやぶり、或は、城を攻めて、敵をほろぼすにも、皆、利を得ること、夜討に如くこと侍らず。然れば、ただ今、高松殿に押し寄せ、三方に、火を懸け、一方にて支へ候はむに、火を遁れむものは、矢を免るべからず、矢を恐れむ者は、火を通るべからず。主上の御方、心にくくも候はず。但、兄にて候ふ義朝などこそ、驅け出でむずらめ。それも、真中指して射とほし候ひなむ。まして、清盛などがへるへる矢、何ほどの事か候ふべき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散して捨てなむ。

掌を反す
説苑に、「變所
 欲成、易於
 反掌。」

行幸、他所へ成らば、御ゆるされを蒙つて、御供の者、少少射むずる程ならば、定めて、駕輿丁も、御輿を捨てて、逃げ去り候はむずらむ。その時、爲朝參り向ひ、行幸を、この御所へ成し奉り、君を、御位に即けまゐらせむこと、掌を反す如くに候ふべし。主上を迎へまゐらせむこと、爲朝、矢二つ、三つ放さむずるばかりにて、いまだ、天の明けざらむ前に、勝負を決せむ條、何の疑か候ふべきと、憚る所もなく申したりければ、左府、爲朝が申すやう、以ての外の荒儀なり。歳の若きが致す所か。夜討などいふこと、汝等が同士軍、十騎、二十騎の私事なり。さすが、主上、上皇の御國あらそひに、源平、數をつくして、兩方に在つて、勝負を決せむに、無下に然るべからず。その上、南都の衆徒を

富家殿
頼長の父忠
實。一七三三
年—一八二二
年。富家殿は、
その別業の
名。

召さるることあり。興福寺の信實、玄實等、芳野、十津河の指矢三町、遠矢八町といふ者どもを召し具して、千餘騎にて参るが、今夜は、宇治に著き、富家殿の見参に入り、曉、これへ参るべし。彼等を待ちととのへて、合戦をば致すべし。又、明日、院司の、公卿、殿上人を催さむに、参らざる者共をば、死罪に行ふべし。首を刎ぬること、兩三人に及ばば、残は、などか参らざるべき」と仰せられければ、爲朝、上には、承伏申して、御前を退り立ちて、つぶやきけるは、和漢の先蹤、朝廷の禮節には、似も似ぬ事なれば、合戦の道をば、武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御はからひ、いかあらむ。義朝は、武略の奥義をきはめたる者なれば、定めて、今夜寄せむとぞ仕り候ふらむ。明日ま

でも延べばこそ、芳野法師も、奈良大衆も入るべけれ。ただ今押し寄せて、風上に、火を懸けたらむには、戦ふとも、いかでか、利あらむ。敵勝に乗るほどならば、たれか一人安穩なるべき。くち惜しきことかなとぞ申しける。(保元物語)

二九、平 和 (壬井晩翠)

海に黄金の波をわかし。
空に焰の雲を染めて、
しづかに落ち行く夕日の姿
見よあめつちの胸の中、
おほいなるもの彼にあり。

海にうつむく影をてらし、
空にいみじき香を吐きて、
岩かげにたつ早百合の姿、
見よあめつちの胸のうち、
うるはしきものこれにあり。
おほいなるもの光を射、
うるはしきもの色を染めて、
夕にみちたる愛と平和、
花はかくるる日を慕ひ、
日はたたずめる花を戀ふ。

三〇、世界的市民

一郡の事に通ぜずんば、完全なる村長たること難く、一縣の事に達せずんば、申分なき郡長たること難し。されば、世界的市民の資格なくして、日本國民の資格のみを有せんこと、思ひも寄らぬ次第なり。

吾人が、今、ここに、世界的市民たるべき教養の必要を説くは、日本國民の資格よりも、世界的市民の資格が大切なる爲にあらず。この資格なくんば、到底、日本國民たるべき實を擧ぐる能はざるを認むればなり。換言すれば、世界的市民の教養は、日本國民たるべき資格の、主なる要素たるを信ずればなり。

マルコ、ポ
ロ

Marco Polo

伊太利の
旅行家。
支那に來
りて、元
の世祖に
仕ふ。(一
九一四年
—一九八
三年)

地球の幅員は、マルコ、ポロの時代に比して、別段の差異なしと雖も、運輸通信の機關は、月に、日に、時に、刻に、これを縮小し、今や、地球一彈丸の句は、詩人の空想に止らず、實際的意味を有することとなり、隨つて、實際的壓迫は、潮の涌くが如く、各國、いづれも、一國を以て、競争の單位となし、以て、商工業、海陸軍、その他、百般の事に相努めつつあり。これ、實に、宇内の變局にして、苟も、國民として、これに處せんには、その教養も、亦、これに應ぜざるを得ず。

且、それ、我が國民が、自國を愛するの熱誠なる、これを、古今東西の歴史に徴するに、殆ど、その比を見ず。これ、今日、世界の各國民が驚歎しつつある所にして、我が國民に、愛國的教養

の必要を説くは、石炭に向つて、油を注ぐが如しといふ者あらん。然れども、時勢の推移に伴ふ思想の變遷は、さのみ樂觀を許さざるものあり。但、愛國心の教養にのみ熱中して、他を顧眄する餘裕なき時は、更に、一種の面白からざる缺點を生ずべし。そは他ならず、世界の舞臺に於ける田舎漢の風味これのみ。若し、孟軻をして、今日にあらしめば、子は、誠に日本人なり。富士山と琵琶湖とを知れるのみといふならん。もとより、熱誠なる愛國心は、田舎漢の特色なり。この特色は、千古不磨たるべく、又、然らざるべからずと雖も、これのみにて、當今の時局に處せん事は、危険の極と謂はざるを得ず。我が日本國民は、いまだ、世界より、正しく諒解せられざるが如く、世界

をも、正しく諒解せず。これ、經世家の宜しく焦心すべき所に
あらずや。一例を擧ぐれば、吾人は、鄰國たる支那に對しても、
時としては、その勢力を過大視し、時としては、その勢力を過
小視し、いまだ、實價に就いて、評定したること無きにあらず
や。これが爲に、我が國民の、支那に對する態度も、朝變暮改を
免れざりしにあらずや。

吾人は、第一に、世界的眼界を開くべし。吾人は、恆に、世界と
いふ一大社會の裏に生活することを自覺し、世界の大局よ
り打算することを忘るべからず。かくするには、眼界の開豁
なるを要す。吾人は、日本國民たること勿論なれども、その日
本國民なるものも、世界といふ社會の一部分にして、善にも

惡にも、世界の氣勢は、その影響を、日本に及しつつある事を
銘記せざるべからず。吾人は、一國の輿論の畏るべきと輿に、
世界の輿論の時としては、更に畏るべきことを知らざるべ
からず。而して、一つの、微少なる箇人の言行さへも、或は、世界
の隅より隅まで響き渡ることあり。故に、吾人は、常に、世界と
いふ舞臺に立ち、世界各國民の視聽の中心に於いて働きつ
つあることを想起し、重大なる責任の念を以て行動するを
要す。これ、固より、世界的眼界より來る、必然の結果なり。

第二に、世界的知識を養ふべし。吾人は、廣く、世界を見渡す
のみならず、また、世界の重なる出來事、世界の重なる國民、世
界の重なる人物等に就いて、相應の知識を有せざるべから

ず。およそ、失策の十中八九は、判断の誤より生じ、誤斷の十中八九は、その事情と事實とを、偵察識得することの不備なるより來る。如何に偉大なる國民と雖も、自己あるを知りて、他を知らざる者は、意外の失敗を免れず。最近三十年に於いて、獨逸が世界的勢力となりし所以は、一つは、官民相競りて、世界的知識を吸収したるにあり。かれ等は、他の氣附かざる世界の片隅の事物にすら、研究を怠らず。その機熟するや、突如として進取し、他人をして、茫然自失せしむるものありたりき。

第三は、世界的同情あるを要す。自己以外を敵視するは野蠻國なり。或は、利害の衝突の爲に、一時は、一國と一國と、戦を

交ふることあらん。しかも、戦争の状態は一時にして、人類相愛の道は、永久不變なり。吾人は、交戰國に向つてさへも、敵對すべき時間と範圍との制限内に於いてこそ敵對するなれ、その他に於いて、これを敵視すべき理由なし。況や、自國以外を擧げて、悉く、これを敵國視するが如きは、これ、亡國の道のみ。我が國民の如きは、固より、今日に於いて、かかる陋態あるべき理なし。

しかも、吾人は、概して、我が國民の國際的同情の範圍の、いまだ世界的ならざるを歎惜するものなり。我が國民を目して、今尙、所謂排外的思想の奴隸なりとするは、これ、同胞に對する侮辱なり、讒誣なり。されど、これを目して、深厚博大なる

世界的同情に富むと謂ふは溢美なり、諛頌なり、正直にいへば、我が國民は、漸く、排外思想を脱して、いまだ、世界的同情の襟度に進まずといふを當れりとす。

日本國民にして、眞に、世界より誤解せられざらんと欲せば、寛裕温厚の心を以て、世界的同情を傾倒し、これによりて、列國の眞相を諒解するに若くはなし。國家は、人によりて組織せらるるとせば、國も、亦、人の如く、血あり、肉あり。この肉や、血や、冷なる利害の打算のみにあらず、亦、實に、同情の熱火によりて、相融合するを得るなり。故に、世界的同情は、苟も、これを調和するに於いて、一大常識ありとせば、決して、その多きを厭はざるなり。

以上の三者あらば、稍以て、世界的市民の資格に於いて、不満なきに庶幾かるべし。而して、此の如くして、始めて、日本國民の資格に於いて、大いなる不足なしと謂ふべし。如何に片田舎にせよ、無邪氣の兒童にせよ、外國人に對して、その背後より、瓦礫を投ずるが如きは、決して、愛國心の看板として誇るべきにあらず。大いなる國家は、大いなる國民によりて立つ。大いなる國民は、その眼界の廣きが如く、その胸懷も、亦、寛なり。單に、國家一時の利害より算するも、鎖國根性は、最も不利益なる根性なり。況や、國家は、崇高なる道義的目的の爲に存在するものたるに於いてをや。(徳富蘇峯—蘇峯文選)

新定中等國語讀本卷六

新定中等國語讀本卷六

一三六

大正十年十二月六日
 大正十年十一月九日
 大正十年九月十日
 大正十年八月十三日
 大正十年七月十七日
 大正十年六月二十三日
 新定再版發行
 新定再版發行
 新定再版發行
 新定再版發行
 新定再版發行
 新定再版發行

不許複製

發行所

東京市神田區錦町二丁目
 振替貯金口座東京四九九一番

株式會社

明治書院

園電話神田二三九八番

著者 相續者 補修者 印刷者

故落合直文
 落合直幸
 萩野由之
 森林太郎
 東京市神田區錦町一丁目十番地
 株式會社 明治書院
 取締役社長 三樹一平

新定中等國語讀本		定價	
大正十年度	臨時定價	卷一、二	各金四拾錢
卷三、四	各金參拾九錢	卷五、六	各金參拾壹錢
卷七、八	各金參拾陸錢	卷九、十	各金參拾陸錢
卷十一、十二	各金參拾陸錢	卷十三、十四	各金參拾陸錢
卷十五、十六	各金參拾陸錢	卷十七、十八	各金參拾陸錢
卷十九、二十	各金參拾陸錢	卷二十一、二十二	各金參拾陸錢
卷二十三、二十四	各金參拾陸錢	卷二十五、二十六	各金參拾陸錢
卷二十七、二十八	各金參拾陸錢	卷二十九、三十	各金參拾陸錢
卷三十一、三十二	各金參拾陸錢	卷三十三、三十四	各金參拾陸錢
卷三十五、三十六	各金參拾陸錢	卷三十七、三十八	各金參拾陸錢
卷三十九、四十	各金參拾陸錢	卷四十一、四十二	各金參拾陸錢
卷四十三、四十四	各金參拾陸錢	卷四十五、四十六	各金參拾陸錢
卷四十七、四十八	各金參拾陸錢	卷四十九、五十	各金參拾陸錢

